

駒場

1996

東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部



KOMABA 1996 SUPPLEMENT

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]1996
SUPPLEMENT

表紙について

ヒエロニムス・ボッシュ

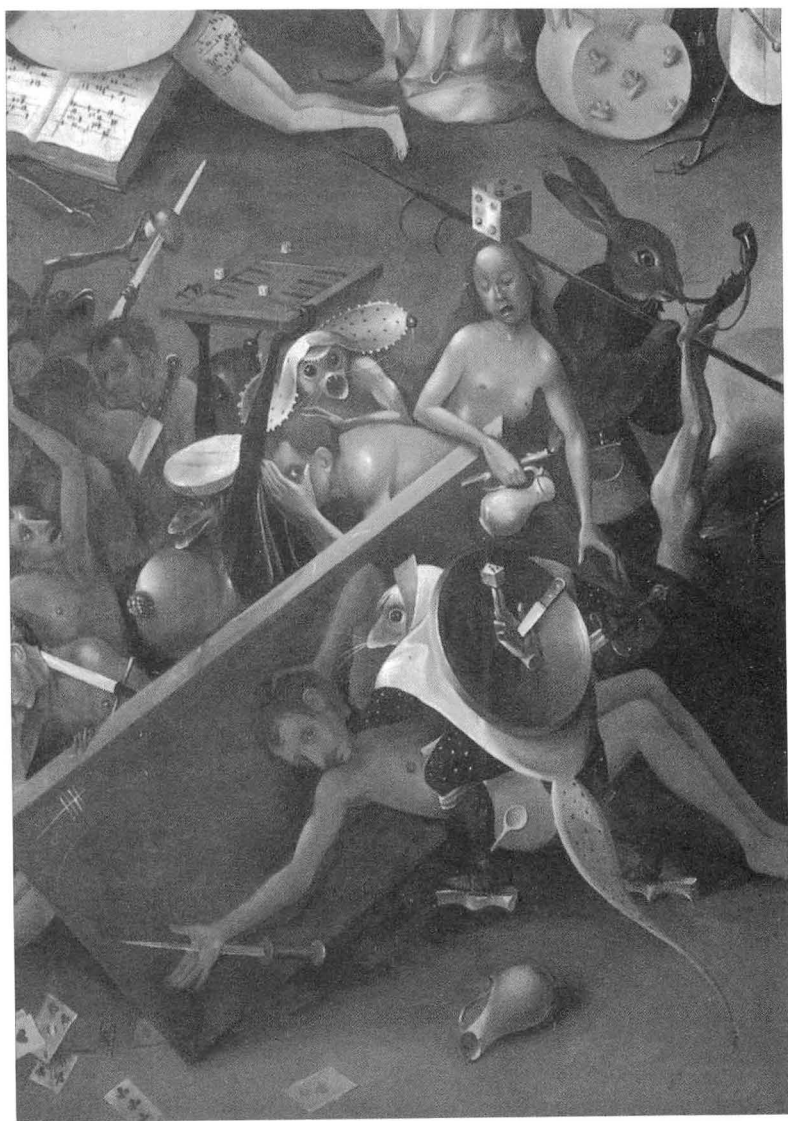
〈快楽の園〉部分

藤田吉香氏による模写

1516年没のヒエロニムス・ボッシュ——つまりペーター・ブリューゲルが生まれる少し前まで活躍していたこの画家——の代表作「快楽の園」は、マドリッドのプラド美術館に陳列されていて、いまでも観客に当惑と奇妙な衝撃をあたえる作品である。というのも、画家は背後で、劫初から人間たちは道徳的に墮落した救いのない存在であったのか、あるいは、一群の研究者たちが主張するごとく、当時の異端派に何らかのかたちで共鳴した画家がカトリックの教えの彼方の裸の人間のありように、墮落した現状を未来に向け切り開く新しい方向を見出していたのか、いずれにせよ、諸説紛々としていて、この絵がしめす「意味」が明瞭でないからである。1929年生まれ画家藤田吉香が、スペイン留学中に模写したもののひとつが、この「快楽の園」である。先日物故した仏文学者寺田透が館長をしていた頃、駒場の美術博物館に入った。そのときいっしょに購入された、やはり藤田の模写作品フラ・アンジェリコの「受胎告知」の部分、すでに「駒場1992」の表紙を飾っている。留学中藤田は「快楽の園」の模写を二度行っており、もうひとつの方は、彼の故郷の福岡市美術館に収蔵されていて、それについて説明する文章で藤田は、「画面を4分して後で組み合わせた。油彩で描いたが、私の感触はテンペラの方が近いように思えた。華麗な画面を感じるが、描いてみると予想以上に地味な、彩度の低い色の組み合わせである」と書いている。さらに、「視覚的な再現には技術的な修練が、原作のもつ魅力の再現には鑑賞眼の高さを伴わなければならない」とも書いている彼は、ここで模写の作業に何が必要なのか説くだけでなく、その後の彼自身の仕事にたいする態度をも説明しているようである。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]1996
SUPPLEMENT



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部

まえがき

「駒場1996 SUPPLEMENT」は教養学部における教育・研究の現状を詳細に伝えるものであり、「駒場1991」として創刊された自己評価報告書の本年度版である。21世紀に向けての発信基地としての駒場キャンパス（東京大学教養学部、大学院総合文化研究科）における研究・教育内容を外から見えるようにしたものである。駒場キャンパスの教官組織は平成8年度より教養学部から大学院総合文化研究科へと部局が移行した。従って、駒場1996以降は東京大学大学院総合文化研究科が教官組織としては正規のものである。しかし、大学院総合文化研究科および数理科学研究科（同じ駒場キャンパスにあり、事務局は同一の場所にある）が東京大学教養学部在籍する全学生（1、2年生）の前期教育に対し責任を有し、さらなる前期教育の改善を目指し努力することには変わりはない。年報「駒場199X」は偶数年は前年度の年報を補完するSUPPLEMENTとして刊行されている。本年報の主要記事である個人業績は、本年度新たに赴任した方々、および来年度の早い時期に着任予定の方々のものに限られている。すなわち、本号「駒場1996 SUPPLEMENT」は「駒場1995」とセットになっている。本年報は装丁をはじめ、類書にない斬新な体裁であるだけでなく、内容としても、教官個人についての各教官個人から提出された情報を含んだユニークな刊行物である。

「駒場1996 SUPPLEMENT」の特徴の一つは、教育について、多数の教官から学生に対して発信された内容を掲載していることにある。大学教育についての自己評価とも言える。それぞれの教育経験をもとに、大学での勉学とは何か、どうすべきか、について述べられている。大学教育の改革について問題点、学生に対する期待と教官側の試行錯誤的な努力については教官の間でしばしば意見交換をしている。一部の教官に端的に述べて頂いた。大学教育の改善に必要なものは何か。教育を行う教官と受ける学生との間に教育についての意識のギャップが大である。まずはその差を互いに理解しようではないか。それから、ギャップを埋めることは意味があるか、どのような工夫をすればギャップを埋めることは可能か。本年報ではさまざまな立場の、又教育科目の異なる教官が高等学校までの学習と大学での学習とは何が異なるかを、あるいは大学での学習の目的、方法、そしてこれまでと異なることで戸惑っている学生に対し、前期教育に携わってきている教官が学生にアドバイス、あるいは教官の前期教育自体あるいは前期教育をうける学生に対して、日頃感じていること、言いたいと思っていることなどを学生に語りかけている。今後、教育についての自己評価を種々の形でおこない、これらの評価を教育内容・方法の改善へ反映したい。各教官の専門とする学問分野によっても、あるいは各教官の個人的な価値観についても多様であることに気づかれると思う。そして、学生へ伝えたい内容は授業を介するものだけではないと教官自身考えていることの一端が分かっていただけだと思う。大学の教官にはよく言えば独創的、悪く言うと一人よがりのところがある。他の教官がどのような人で、どのように学生に接しているのか、等については互いに意見交換をすることは大事であると考えている。しかし、実際にその努力をしている人は高等学校までの教師に比較すると少ないように思う。他の教官の教育の内容、方法についての考えを聞き、参考にするだけでなく、学生からの発言、意見、感想などからも強く影響を受ける。教育はコミュニケーションの内容だけでなく、実際に行われるコミュニケーションの仕方が重要に思える。

科学・文化の発展には学問に対する価値観に多様性と普遍性の両面を有する人間の間の相互作用が重要である。それを媒介する人間同士のコミュニケーションである。一方、学術的成果をあげるには方法論を明確に意識することが必要かつ有効である。方法論の中身は自然科学、社会科学、人文科学など学術の分野によって異なる。時代とともに変化する点もある。しかし、分野によらずに学術一般に共通する基礎的な方法論がある。表に現れるものはコミュニケーションであり、情報処理である。両者は現代の学術ではあらゆる分野に共通する面とも捉え

られる。自己評価とは何か。情報を公開し、これに対し自ら、その計画と成果との関係の評価することであろう。自己評価は他者からの評価があつてはじめて、計画—評価—計画の見直し（計画の続行、改訂、発展）のサイクルが完成する。大学での教育・研究について、どのような点について、どのような方法で評価を行うか、すなわち、評価の具体的な目的および方法についての考察は現在のところ大変不十分な状態であることは否めない。一方、大学入学選抜あるいは入学後の教育についての教育内容・方法についての評価も十分な論議・考察のなされないまま、高校生、予備校生などでの勉強がマニュアル化されている傾向を放置してきたきらいがある。学問、学術が持つ本来の意味、価値を世代を越えて評価し、議論することを始めるべきである。これがやっと端緒についたと言ってよいであろうか。誰かがやるのを待つのではなく、自ら呼び込むために行っている試行錯誤の成果として、この年報を読んでいただければと思う。教育・研究の内容・方法のより一層の発展のためには、情報の充実に向けてさらなる努力をしたい。忌憚のない意見、批判あるいは助言を頂ければ幸いである。

1996年3月

「駒場1996 SUPPLEMENT」

年報編集委員会

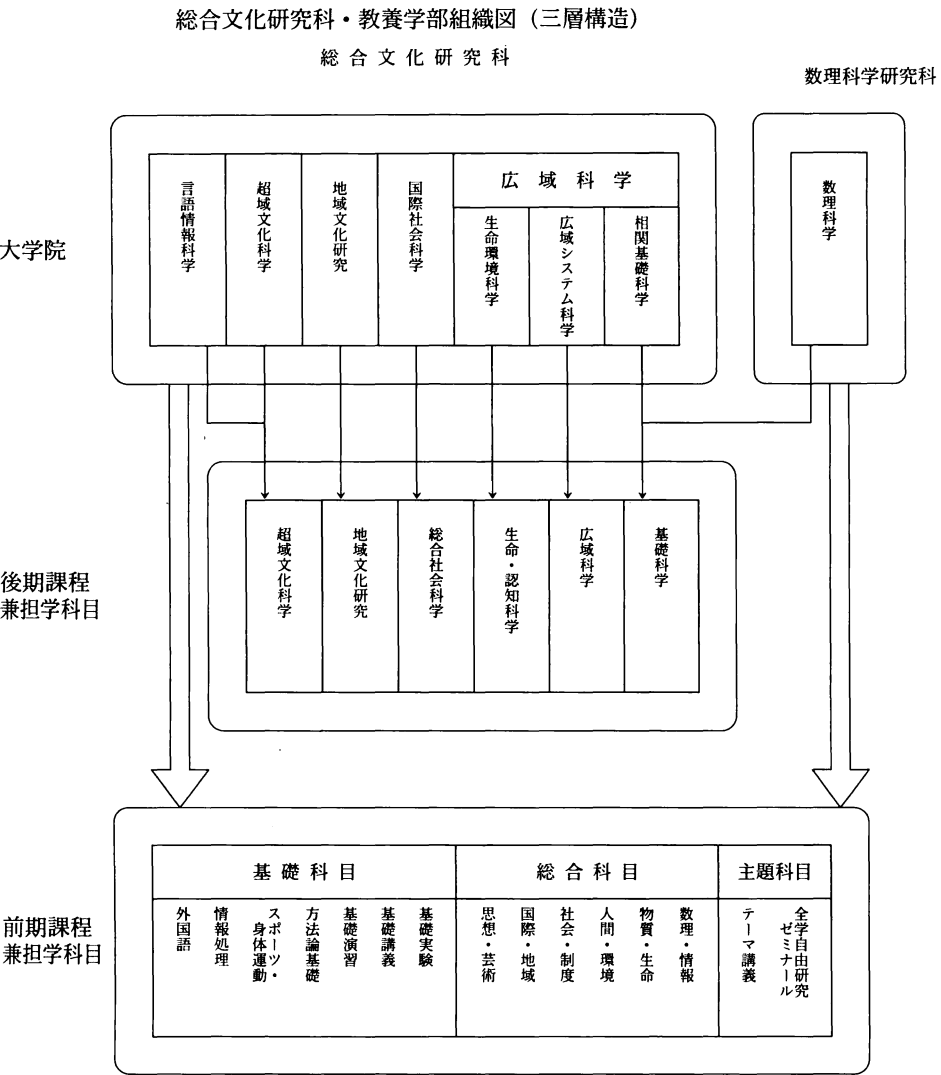
I

総合文化研究科・教養学部は
どのような組織か

1 大学院重点化計画の完了

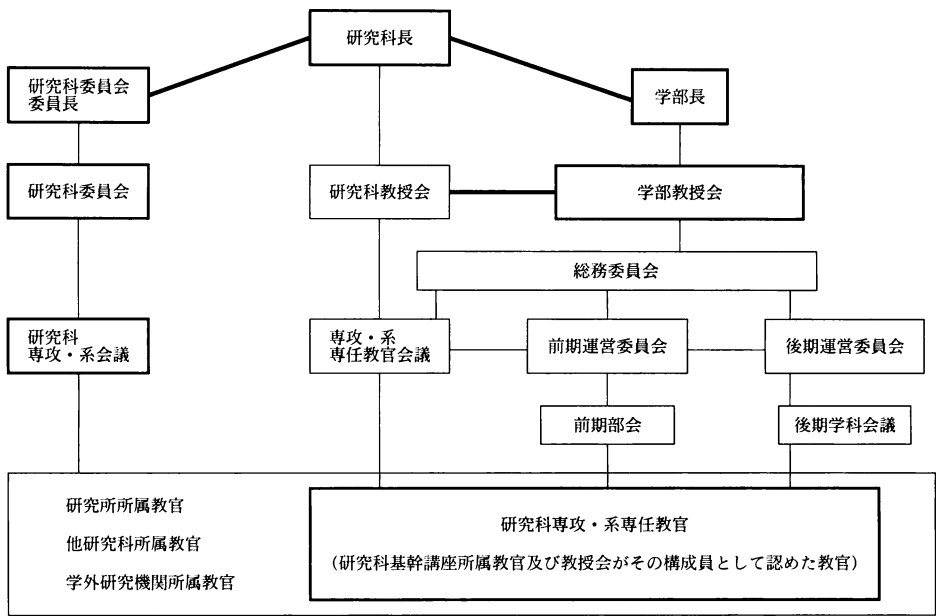
1996年4月、既設の文系6専攻が再編・重点化されたことにより1993年から始まった大学院重点化計画が完了し、大学院総合文化研究科は東京大学における唯一の文理横断型大学院として発足した。大学院重点化は、第一義的には、前期教育を中心に編成されていた人文、社会、外国語、理科、体育といういわゆる五科体制を廃止し、教官組織を大学院レベルに移すことを意味しているが、この改革は単に五科と大学院にかかわる教官組織の移行というだけでなく、大学院専攻の再編拡充、後期課程（教養学科、基礎科学科）の学科再編とも一体のものであり、さらに前期カリキュラムの大幅な改定とも連動していた。そのため総合文化研究科・教養学部・教養学部の教官組織、事務組織、ならびに管理運営のあり方も大幅に改定されることになった。改革の詳細はすでに『駒場 1995』に記載されているが、今年度をもって運用段階にはいった教育および運営組織を改めて総覧するとおよそ次の通りである。

上に述べた三層にわたる改革の結果、総合文化研究科・教養学部の新しい教育機構は次のようになった。



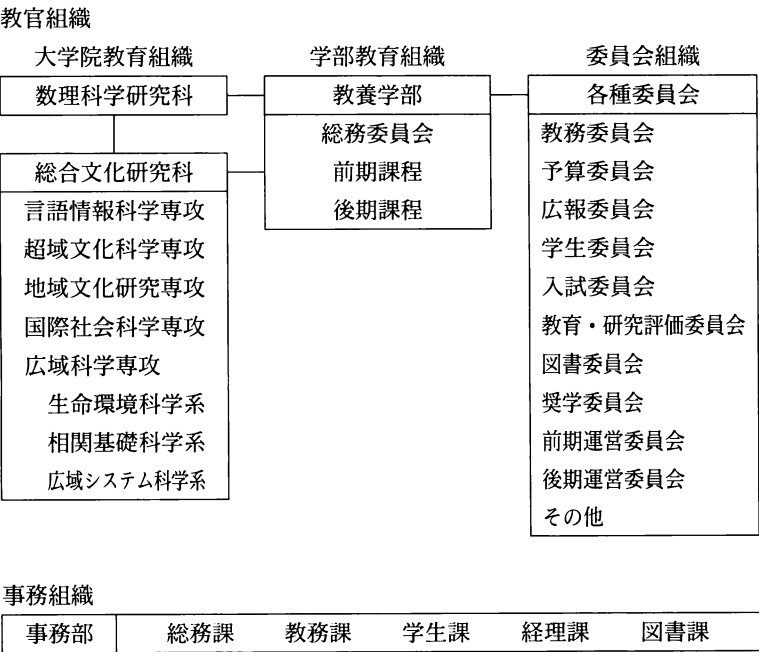
管理運営については、1995年10月から半年にわたる試行期間を経て、1996年4月1日をもって次のような新しい組織に移行した。

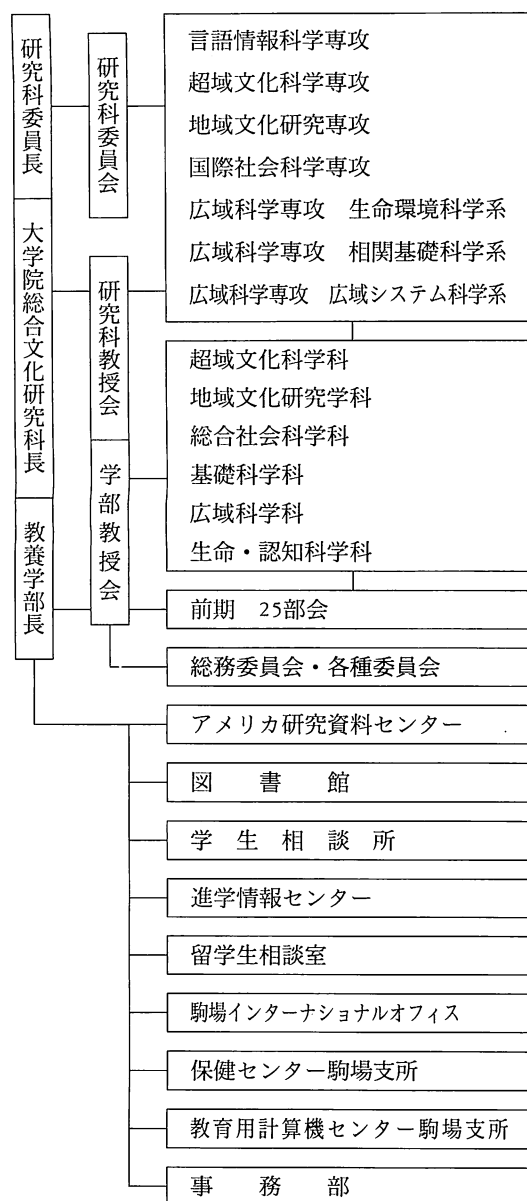
総合文化研究科・教養学部の管理運営組織図 1996年度より



新制度のもとにおける総合文化研究科・教養学部の教員組織および事務組織を総図の形で示すと次のようになる。

総合文化研究科・教養学部の教員組織および事務組織





大学院部局化により、教官は本務は大学院教育・研究にある。教養学部における前期課程教育および後期課程教育は総合文化研究科あるいは数理科学研究科の所属教官が兼担して実施している。

1 総合文化研究科の教官（教授、助教授、専任講師、助手）は次の専攻・系のどれかに所属している。大学院教育はこれらの専攻・系毎に行い、研究科委員会にて総合文化研究科の大学院の教務事項（入試、単位認定、学位の審査など）は決定される。

専攻名	系名
言語情報科学専攻	
超域文化科学専攻	
地域文化研究専攻	
国際社会科学専攻	
広域科学科専攻	生命環境科学系 相関基礎科学系 広域システム科学系

注1 専攻・系に所属していない教官も若干いる。

注2 専任教員でない客員教授、客員助教授は大学院の教育に対してのみ責任を有する。

2 教養学部の後期課程（3,4年生）

後期課程教育の責任は各学科を構成する教官にある。構成教官は大学院の専攻・系とほぼ一致しているが、一部に異なる専攻・系の教官が加わっていることがある。また、全ての教官が後期課程の構成教官となっているわけではない。

後期課程学科名	主たる構成教官の所属専攻・系	主たる構成教官の前期部会
超域文化科学科	超域文化科学専攻、 言語情報科学専攻	英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、 ロシア語、スペイン語、人類学、国文・漢文学
地域文化研究学科	地域文化研究専攻	英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、 ロシア語、スペイン語、古典語、歴史学
総合社会科学科	国際社会科学専攻	法・政治、経済、社会・社会思想史、統計、国際関係
基礎科学科	相関基礎科学系及び生命環境科学系、数理科学研究科	相関自然、物理、化学、哲学・科学史
広域科学科	広域システム科学系	物理、化学、生物、宇宙地球、情報・図形、人文地理学
生命・認知科学科	生命環境科学系	化学、生物、心理・教育学

3 教養学部前期課程教育

教養学部前期課程教育は総合文化研究科と数理科学研究科の教官が兼担して責任を負う。

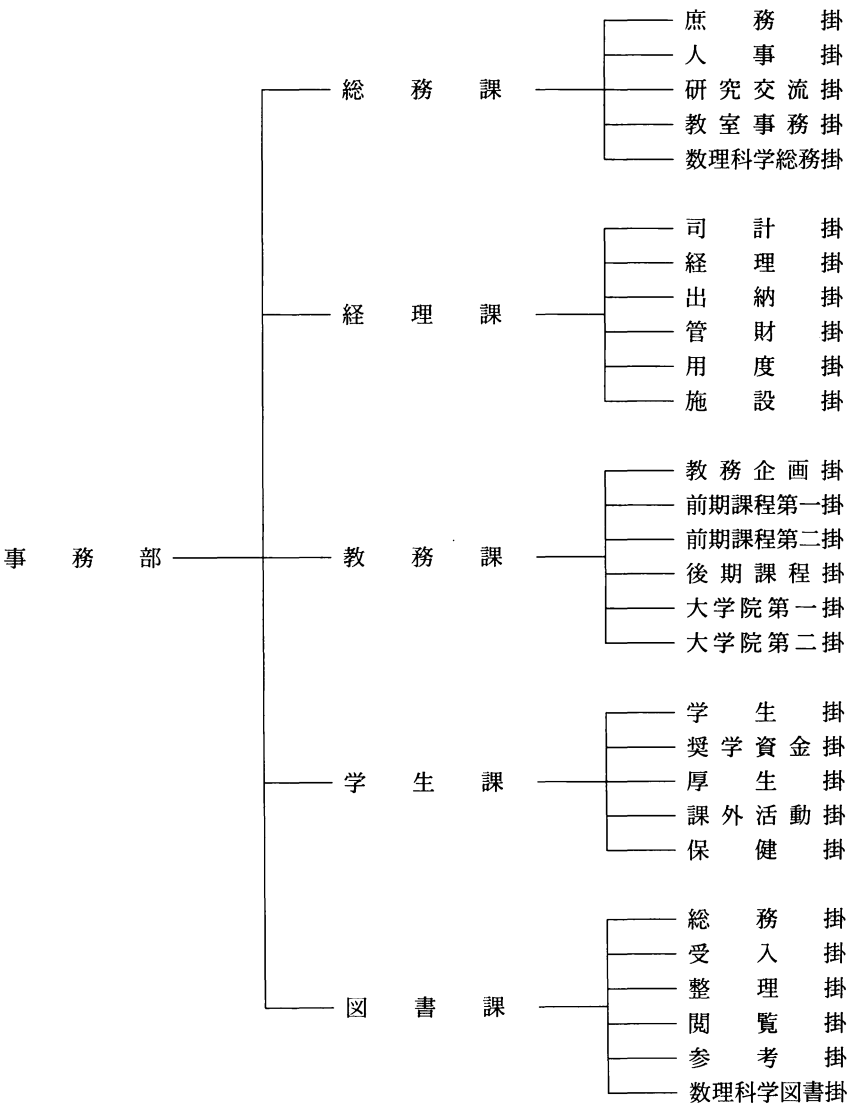
前期課程（1、2年生）は部会の責任で行い、教務委員会にて調整する。単位認定、前期課程修了の認定は教授会により決定される。総合文化研究科の教官は前期課程の授業科目の責任母体である各部会のいずれかに所属している。

研究科専攻・系と前期部会の関係および前期教育課程で履修すべき授業科目と授業科目の担当母体（前期部会）の関係は以下の通りである。

	科 目 名	担 当 部 会 名
基 礎 科 目	外国語(既修外国語)	英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語
	外国語(初修外国語)	ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、ロシア語、スペイン語
	情報処理	情報・図形
	方法論基礎・人文科学基礎	人類学、歴史学、国文・漢文、心理・教育学、人文地理学
	方法論基礎・社会科学基礎	法・政治、経済、社会・社会思想史、統計、国際関係
	基礎講義・数理科学基礎	数理科学研究科(数学教室)
	基礎講義・物質科学基礎	物理、化学、相関自然
	基礎講義・生命科学基礎	生物、相関自然
	基礎演習	人類学、歴史学、国文・漢文、心理・教育学、人文地理学、法・政治、経済、社会・社会思想史、統計、国際関係、外国語、スポーツ・身体運動
総 合 科 目	基礎実験	物理、化学、生物、スポーツ・身体運動
	スポーツ・身体運動	スポーツ・身体運動
	A 思想・芸術	哲学・科学史、英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、ロシア語、スペイン語、古典語、国文・漢文、歴史学、社会・社会思想史
	B 国際・地域	歴史学、国文・漢文、英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、ロシア語、スペイン語、古典語、人類学、国際関係、経済
	C 社会・制度	法・政治、経済、社会・社会思想史、統計、心理・教育学、人類学
	D 人間・環境	人文地理、心理・教育学、哲学・科学史、化学、生物、スポーツ・身体運動、情報・図形
	E 物質・生命	物理、化学、生物、宇宙地球、相関自然
主 科 目	F 数理・情報	(数学教室)、情報・図形、統計
	主題科目は年度毎に異なる	特定の部会が責任を持っていない。 教務委員会に担当の委員会がある。

事務組織は総合文化研究科、数理科学研究科、および教養学部の三者を包括しており、総務課と教務課における若干の機構改革を経たのち、次のような組織によって運営されている。また各建物および部署に分散していた教室事務をできるかぎり統合し、技官室も統合して共通技術室を設置した。

事務組織図



2 共通技術室

教養学部には教官や事務官のほかに技術官と呼ばれる技術職員が勤務している。技術官は従来から教養学部における教育・研究活動にとって不可欠な役割を果たしてきたが、平成5年度には前期課程における実験実習カリキュラムの大幅な改訂、平成6年度には液体ヘリウムの大型供給機器の導入、また平成8年度にはSCS（Space Collaboration System）事業の開始等に伴って新たな業務が加わった。さらには大学院重点化によって大学院生が増加し、技術官の業務量は今後とも増加の一途である。

このような状況に対処するため、教養学部ではこれまで教務課（6名）と総務課（3名）に分かれて所属していた技術官を統合し、理系評議員を室長とする新しい技術官組織「共通技術室」を創設した（平成8年7月1日発足）。技術官の具体的な業務は主なものだけでも、

1. 前期および後期課程における実験補助
2. 視聴覚教材・機器の維持管理、SCSの運用
3. 液体ヘリウムなど低温寒剤の取扱
4. 放射性同位元素（RI）使用施設の安全管理
5. 実験機器や部品の機械工作

と多岐にわたる。現在、共通技術室が設立されて半年が経過したが、技術官相互の緊密な協力関係によって様々な点で今までにはない成果が挙げられつつある。例えば、従来、教官や大学院生に依存していたRI管理が複数の技術官で担当できるようになり、SCSでは技術官一丸となった協力によって対処できるようになった。また、平成8年12月18日には共通技術室研究発表会が開催され、技術官の様々な創意工夫が披露された。

平成9年度には共通技術室に固有の予算やスペースが配分され、また事務機器も整備される予定である。しかし、共通技術室には課題がないわけではない。いや、むしろ課題が山積していると言い換えるべきであろう。それは技術官定員の絶対的な不足である。駒場には約9000名の学生や大学院生、400名以上の教官が活動しているにも拘らず、技術官はわずか9名に過ぎないのである。教養学部において高度な教育研究環境をなお一層向上させるためには、教育研究にかかる優れた技術と知識をもつ支援職員の人材確保が不可欠である。

3 キャンパス整備計画

東京大学は、本郷、駒場、柏の三つをメインキャンパスとし、それぞれ独自の特徴と固有の目的を持って研究・教育に当たりつつ、しかも大学全体としてバランスの取れた高度な発展を遂げることを目指している。このうち駒場キャンパスは、教養学部等がある駒場Ⅰキャンパスと、その西方約1kmの先端科学技術研究センター等がある駒場Ⅱキャンパスとからなっている。

これらのメインキャンパスは、それぞれ長期的かつ専門的視野に基づくマスタープランを策定し、そのマスタープランに照らしつつ個々の施設ならびに環境整備を進めていくこととしている。そのため副学長を室長とし各関連部局の委員、建築専門家集団および事務当局からなるキャンパス計画室が設けられており、常時検討を行っている。

また、各キャンパスにはそれぞれキャンパス整備委員会が設けられ、それぞれのニーズに応じて具体的な施設整備ならびに環境整備などの計画が策定される。整備計画の原案は各部局からの要望を聴取しつつキャンパス計画室が準備し、マスタープランに適合するものであるかどうかを整備委員会で確認する。また、具体的な整備事業の実施に当たっては、事前にキャンパス計画室に諮り、整備委員会の承認を得ることとされている。このように一見窮屈とも思える縛りが掛けられているのは、短期的ないしは近視眼的に個々の要求実現を図る形で施設や環境の整備が進められると、長期的には一貫性のない劣悪で使い勝手の悪いキャンパスへと変貌していきかねないからである。逆に言えば、マスタープランに沿った整備・開発を進めることによって、長期的にはそれぞれ最適なキャンパス像に近付いていくことが期待できるのである。

駒場Ⅰキャンパス再開発計画の概要

駒場Ⅰキャンパスには、教養学部・総合文化研究科および数理科学研究科があり、全学の前期課程学生約7,500人、後期課程学生約500人、および大学院生約1,000人の合わせて9,000人を越える学生が学園生活を送っている。これら前期課程、後期課程および大学院の各段階で高度な教育研究体制を維持し、発展させるにはキャンパスの再開発が不可欠となっており、再開発計画の概要が定められている。同キャンパス再開発のマスタープラン策定に当たっては、次の3点が目標とされている。

- (1) 最先端の教育研究施設の整備——教育・研究の高度化に対応した最先端の施設・設備を擁する最適の大学キャンパスを実現する。
- (2) 国際社会に「開かれた大学」の理念の具体化——駒場Ⅰキャンパスの特性を活かして、学生・教職員の福利厚生を図りつつ、一般社会の文化的関心に大学として適切に応えるために必要な整備を行う。
- (3) 恵まれた自然環境の活用——武蔵野の面影を残す林、清涼な湧き水など恵まれた自然環境を最大限活用するとともに、自然環境を基にして外部空間の整備を図る。

駒場Ⅰキャンパス整備状況

上記3つの目標を具体化していくために1996年度に実施ないし予定されたキャンパス整備事業は以下のとおりである。

目標(1)については、具体的にはキャンパス南部および中央部の講義棟、研究棟、図書館などからなるアカデミックゾーンの再開発を目指しており、1996年度には同ゾーン北西部の16号館Ⅱ期棟（自然科学系研究棟）および南東部の数理科学研究科Ⅱ期棟の建設が開始されている。

目標(2)に関しては、三鷹国際学生宿舎の整備充実に伴い、1996年3月末日をもって廃寮となったキャンパス東部の旧駒場寮跡地に、学生や教職員が集って文化・芸術・スポーツなどの諸活動を行うことができる福利・厚生施設および風致地区を包括した新しい活動拠点「CCCL (Center for Creative Campus Life) 駒場」を創成する計画を推進している。CCCL駒場は21世紀に向けての文化・芸術・スポーツなどの創造的空間として、さらに地域社会、国際社会への文化ならびに情報の発信基地となるはずのものである（詳しくは『駒場1994』の26～29ページ参照）。すでにその一環として、1995年度の予算によってキャンパス北東部に豪華なシャワールームが、またキャンパス東端の池畔に瀟洒な伝統文化活動施設（新「柏蔭舎」）が、それぞれ完成して大いに利用されている。また、1996年度には旧駒場寮建物を取り壊した跡地に、CCCL駒場計画の中核ともいうべき「キャンパスプラザ」を建設することとしており、その予算も獲得済みである。「キャンパスプラザ」は、サークルやクラスの活動を中心としつつも、これらを越えた同世代間の交流、教職員・地域を包み込む広範囲の人的・文化的交流の場ともなる「多文化交流施設」と、異文化や異なる分野の文化活動が、互いに溶け合いたがり合う場としての「多文化交流ホール」とによって構成される。

目標(3)の具体化では、キャンパス南東部の矢内原公園や東端部池畔の自然環境を整備保全するとともに、キャンパス随所にある林をできるかぎり育成するほか、長期的にはキャンパスを東西に走る主軸線である銀杏並木道に加えて、南北に走る二本の副軸線を整備していくこととしている。1996年度には、新「柏蔭舎」周辺の植栽の整備ならびに銀杏並木道やキャンパス西部、第一グラウンド周辺など歩道部分のインターロッキング方式による環境整備が行われた。

II

駒場キャンパスは どのような点でユニークか

駒場キャンパスの特徴の一つは既存の学問分野の範囲にとどまらない活動への広がりがあることにある。日本という枠を超えた普遍性を自然に身につけるための国際性が高いことは三鷹国際学生宿舎となっていることに端的に現れているが、その他に、いくつもの国際的な交流が日常的にこのキャンパスで行われ、一部は制度化されている。教養学部および総合文化研究科は実に学際的な部局である。これが従来にもまして制度化されたのが今回の改革である。さらにインターネットから通信衛星を用いた教育・研究の新しい試みの拠点としての活動がある。これらの新しい動きを含めて以下に紹介する。

1 国際性

ここではAIKOMプログラムと外国人留学生についてのみとりあげる。

1. AIKOMプログラム——短期交換留学制度

平成7年10月に第1期生を迎えて発足した教養学部短期交換留学制度（Abroad in Komaba Program、略称AIKOMプログラム）は、平成8年7月に1年目を終え、平成8年10月から第2期に入っている。本プログラムは、交流協定を締結した海外の諸大学との間における学部レベル（3、4年生）の短期（この場合の短期とは1年間を指す）学生交換留学制度であり、本学部に海外から受け入れる留学生に関しては、次のような原則のもとで、特別の教育体制がしかれている。(1)英語によるカリキュラム編成、(2)協定大学間における単位の相互認定、(3)東大生と留学生との共通授業。これらはいずれも駒場キャンパスの国際化に大きく資するものであるといっている。以下、2年目を迎えたAIKOMプログラムの現状と展望について簡単に述べてみたい。

プログラムの性格

プログラムの立案と運営は、以下の点を基本としている。(1)大学間協定は対等の原則に立つ。(2)協定校は全世界的視野に立って選考する。(3)留学生と日本人学生との交流を制度的に促進する。

この原則に従って、現在までに短期交換留学協定を締結した相手校は、以下の10か国14大学である。

中国：北京大学 韓国：ソウル国立大学 フィリピン：フィリピン国立大学
インドネシア：ガジャマダ大学 マレーシア：マラヤ大学
オーストラリア：シドニー大学、モナシュ大学
ニュージーランド：オークランド大学、オタゴ大学 英国：ウォリック大学
アメリカ合衆国：カリフォルニア大学連合、ミシガン大学、スワースモア大学
チリ：チリカトリック大学

この内、1年目には8か国9大学から18人、2年目には9か国12大学から21人の留学生を受け入れている。また教養学部からの派遣学生数は、1年目（平成8年7月までの出発）は3か国5大学に12人、2年目（平成8年8月から平成9年7月までの出発）は現在までの決定分で8か国11大学18人である。

対等の原則に立った交換という点では、授業料相互不徴収、単位相互認定についていずれの大学との関係でも対等性が貫かれているものの、奨学金や宿舍提供に関しては厳密な意味での対等性を期待し難いのが現実である。しかし、留学生交換の基盤を安定したものにするためには、協定書にうたってある対等性をできる限り実現すべく、協定相手校に働きかけていくことが必要である。

協定校の地域は、2年目から英国のウォリック大学、チリのチリカトリック大学との交換が始

まったことで1年目よりも広がったが、ヨーロッパの他の地域など、さらに拡大していく余地がある。ただし、本プログラムで駒場に受け入れることができる学生の総数が提供可能な宿舎数（現在受け入れ学生は全員三鷹国際学生宿舎に居住している）によって目下20名余に限られているため、これ以上の対象地域拡大がすぐには行えないのが現状である。またウォリック大学からの留学生の場合、英国が平和友好交換留学生の対象国にはっていないため、日本国際教育協会による奨学金の額が他の諸国からの留学生よりも少額であるという問題も存在し、対象地域の拡大が新たな困難を呼んでいることにも触れておかねばならない。

日本人学生との交流は、授業の場において、宿舎において、学生コモンルームでの交流やチューター制度（留学生各人に日本人学生のチューターを配置している）などを通して、かなりの程度進んできた。本プログラムで1年目に海外の大学に派遣されていた学生たちが、帰国した後、留学生と日本人学生の間の仲立ちともいえる役割を演じている状況も見られる。ただし、交流の程度はまだ十分とはいえず、それを意識的に推進していく必要は今後とも大いにあるといえよう。

カリキュラムと成果・問題点

AIKOMプログラムの授業は、以下のような形で行われている。各学期の修得必要単位数は16単位である。

午前：日本語の授業…3レベルに分かれての授業で、必修科目ではないが履修が奨励される。

本プログラムでは、日本語履修経験が全くない学生でも受け入れるため、全く初歩からの教育も行われる。この日本語の授業は、AIKOM留学生だけに開かれており、他の学生は出席できない。

午後：①AIKOMプログラム必修科目

リレー講義およびそれに対応する演習…教養学部教官が毎週交代で講義を行った後、そのテーマに関わる演習が実施される。この演習では留学生と日本人学生がペアで報告を行っている。1年目と2年目を合わせ、このリレー講義を英語で行う教養学部教官は40名余にのぼり、幅広い教官と本プログラムの接点となる授業である。

日本社会と日本文化についての授業各一…これらの授業はフィールドワークも含んでいる。学生の間で日本についての予備知識の格差が大きいことが、これらの授業の運営を難しくしていることは、一つの問題点である。

②AIKOMプログラムのために新たに設定された英語による授業（選択科目）

各学期に3つずつ開講されている。1年目の冬学期には、日本の政治、日本の演劇、日本の言語が、1年目の夏学期には、日本の経済、日本の文学、日本の言語が、2年目の冬学期には、日本の外交、日本の演劇、日本の思想がテーマとなった（この分類はおおまかなものであり、個々の講義はより特定された内容を扱っている）。

③教養学部後期課程で開講されているその他の英語による授業（選択科目）

④教養各学部後期課程で開講されている日本語による通常の授業（選択科目）

日本語での授業を聴くことができるだけの日本語能力を備えた留学生は、これが可能である。1年目にも2年目にも若干名ではあるが、そのような留学生がいた。

1年目の留学生が授業の中で書いたレポートなどの内、いくつかのものは『AIKOM Forum』という冊子に編集して公表することにした。この冊子によくあらわされているように、全くの手探りで開始された本プログラムは、相当の成果を生んだといってよい。しかし、1年目が終わって、AIKOMプログラムの授業実施に当たっての全体的な問題点もまた明らかになってきた。

それは、すでに述べたように留学生の間で日本や日本語についての予備知識さらには学習意欲のギャップが大きいために、統一した目標設定や授業運営に困難が生じることである。日本の大学で学ぶことに本当に積極的な意義を見いだしている質の高い学生が今以上にそろうようにするため、さまざまな努力をしていく必要がある。

展望と課題

本プログラムの規模としては、現在の受け入れ留学生20名余という数を少し増やした方がよいと考えられる。しかし、それには宿舎の数、奨学金受領の可能性の問題、事務体制の整備・効率化など、克服すべきさまざまな課題がある。さしあたっては、現行の規模を当分の間維持しつつ、内容の充実化をはかることになるが、その場合でも、上述のごとく質の高い留学生の受け入れをめざすとともに、プログラムの運営、授業実施の各面にわたって、より広い範囲の教養学部の教官が関与していくような体制を作り上げていくことが求められる。

また、AIKOMプログラムにおいては、ともすると受け入れ留学生の問題のみに注意が向けられがちであるが、派遣留学生に関してもこの制度が十二分に活用されるよう留意していかなければならない。

日本における大学教育、とりわけ学部レベルの教育の国際化の新たな試みとして、きわ大きな意味をもっているプログラムであるだけに、1年目の成果をふまえ、新たな発展の途を追及していきたい。

(短期交換留学運営委員会委員長 木畑洋一)

2. 外国人留学生の現状

教養学部は東京大学の中で工学部に次いで2番目に多くの外国人留学生を擁している。平成8年11月現在で学部前期課程に88名、学部研究生8名が在籍し、また大学院総合文化研究科には233名が在籍し、その内訳は修士課程57名、博士課程105名、研究生71名である。数理学部研究科には20名が在籍し、修士課程5名、博士課程13名、研究生2名がその内訳である。出身国・地域の中で特に多いのは中国と韓国で、留学生全体の約58%を占める。

こうした現状に対応するために、教養学部では昭和62年7月に留学生相談室が設置され、また平成8年4月には、駒場インターナショナル・オフィスが開設された。同オフィスでは留学生関係の事務手続きをはじめ、宿舎、奨学金、留学生に関する諸行事、入国管理関係などの紹介や助言を幅広く行なっている。同オフィス内に留学生課第四掛の分室が設置されたこともあって、駒場キャンパスで学ぶ留学生をさまざまな面から支援する体制はいっそう充実したものとなった。平成8年現在、留学生担当講師4名と事務職員1名が留学生の勉学・厚生上の問題の解決、実務に携わっている。

現在、学部1、2年生の約半数は日本政府の国費留学生で、東京外国語大学または大阪外国語大学付属日本語学校で一年間日本語や基礎科目の予備教育を受けた後、文部省の推薦を経て本学で選考され入学した者である。その他にシンガポール、タイ、インドネシア、マレーシアからの外国政府派遣留学生と私費留学生がおり、留学生統一の日本語能力試験と学力試験の成績を参考に、本学の留学生特別選考試験を経て入学が許可されている。大学院では4月と10月に書類選考による研究生の受け入れを行なっている。学部、大学院ともに留学生は定員外の扱いで受け入れられているが、入学後の教務上の扱いは日本人と全く同じである。

学部留学生は入学後二年間、大学院研究生は原則として一年間チューターによる学習指導を受けることができ、総合文化研究科ではその国際的なオリエンテーションもあってチューター

を引き受けた学生が熱心に指導に当たっている例が多い。また特に学部の理科系の学生には理数科の補習が留学生担当講師により行われており、着実な効果を挙げている。

留学生相談室と駒場インターナショナル・オフィスは、そうした学習・研究面でのバックアップの中心でもある。14号館1階の同オフィス内の自習室は、留学生の自習あるいはチューターとの共同学習のために、また幅広い情報交換の場として開放されていて、関連の機材や新聞・雑誌、参考図書等の整備も積極的にすすめられている。また留学生相談室では、平成6年度後期から、主として大学院研究生を対象に、日本語会話・作文と日本史概説の補習授業を運営し、各自が研究を進める上での基礎学力の充実をはかっており、成果を挙げつつある。

留学生担当講師は相談室の運営をささえると同時に、大学院生を対象に日本文化研究の演習を実施するほか、論文の指導など留学生の学習・研究上の相談に対応している。留学生の個人的な問題や悩みについては、相談室で随時相談に応じるとともに、留学生間の、さらには日本人学生との交流を積極的にすすめるために懇談会やスポーツ大会なども企画し実施している。また、はじめて駒場にきた留学生のために、駒場インターナショナル・オフィスの協力を得て「Welcome to Komaba」(外国人留学生のための手引き・日本語版、英語版)を作成し、平成8年度から配布をはじめた。

留学生の相談の大体の傾向としては、例年、入学時期の4月と10月にはさまざまな手続きに関する相談や新しい生活への不適應の悩みが新入生から多く寄せられ、学期中は進学や修学に関するもの、12月から3、4月にかけては在留関係や奨学金の相談が多い。

外国人留学生が安心して勉学・研究に励むために奨学金、宿舍のもつ意味は大きく、現状は深刻である。奨学金に関しては、国費、民間ともに35歳の年齢制限を設けているものが多く、平均年齢の高い駒場の大学院留学生には不利な条件となっている。宿舍の問題についても、駒場インターナショナル・ロッジや三鷹国際学生宿舍の建設により単身の学生にとってはかなり状況は良くなったものの、夫婦や家族で滞在している留学生に対しては、白金台インターナショナル・ロッジにきわめて限られた数の宿舍が用意されているだけで、民間のアパートを探す場合の条件も極端に悪く、駒場での勉学を願う留学生の大きな障害となっている。家族寮の建設がすくなく望まれる所以である。

駒場の留学生の精神的な不安は、学部1、2年生には学業成績と進学の問題がある。最初の学期は、特に日本語での授業と大学生活に適應するためのかなりのストレスがあり、それを乗り越えることが大きな試練となっている。学部・大学院の研究生の多くは、大学院の正規課程に入学することを希望しており、その入学試験の準備のなかで日本語や英語の学習に対する深刻なあせりが生じやすい。また後期課程の学生の中には、論文作成に伴う指導教官との意思の疎通に悩みをもつ者があり、とくに本人の不安が大きい場合には、保健センターの協力を仰ぐこともある。

留学生の指導や厚生については、本学部留学生委員会の諮問を受け、さらに留学生問題懇談会で種々の連絡・調整が行われている。

(徳盛 誠)

2 学術性

教官組織が教養学部から大学院総合文化研究科へと部局化するとともに、本学で唯一の文理横断型の部局としての内実も改革された。大学院部局化前は文系と呼ばれた教室のうち、心理学教室、教育学教室は理系が主体の広域科学専攻生命環境科学系、心理・教育学部会へと所属が変わり、人文地理学教室は広域科学専攻広域システム科学系、人文地理学部会へと変更された。また、体育科も新しい組織では広域科学専攻生命環境科学系の一翼を担うという教官組織になった。一方、教養学部後期課程の教養学科、基礎科学科も再編され、従来、教養学科第一の分科であった科学史・科学哲学分科、人文地理学分科および人間行動科学分科はそれぞれ、基礎科学科、広域科学科、生命・認知科学科の分科として再編された。このように後期課程および教官組織においても学際性（文理横断型）をうたうに相応しいものになっている。ここでは従来は文系と考えられていた教室・分科から新しい広域科学専攻あるいは理系が主体の学科に移管された方々からの現状の報告を掲載する。

1. 後期課程の学科の再編

Ⅰ 教養学科から基礎科学科へ(哲学)

科学史・科学哲学分科が駒場の地に生まれたのは、今から40年以上まえ、教養学科設立の時であった。それ以前には「科学史・科学哲学」という名の学問分野は日本のどこの大学にも存在しなかった。世界的に見ても科学史や科学哲学という名の学問分野が大学で一定の市民権をもち始めたのは戦後のことであり、この点から見てもこの分科の設立がどれほど先駆的な意義をもっていたかが伺われる。実際この分科の卒業生たちは、長い間にわたって「カガクシ・カガクテツガク」という言葉がどのような漢字で表されるのかを理解してもらうのに苦労したことをはじめ、新たな進路、新たな就職口を開拓するのに大変苦労することになった。そうした苦労が実って最近では幾つかの大学の教育組織にもこの名のついたものが見受けられはじめたし、また一般のジャーナリズムの世界などでも一定の位置を確保しはじめたようである。こうして、科学史・科学哲学という学問が日本社会のなかで一定の制度化を遂げはじめたときに、今回の後期課程の改革を通して、わが分科は新たな出発を目指して、大きく変化することになった。

これまで科学史・科学哲学分科は教養学科第一(教養学部)に属していたが、今回の改革を介して、これまでの基礎科学科第一と一緒に新たな基礎科学科を形成することになった。

大学での研究・教育組織の改革のさいには、どのような理念で研究を行い、どのような方針で教育を行うのか、という学問論や教育論に関する議論が最も重要である。このことは言うまでもないことであるが、ややもすると、実際の改革の議論ではどの組織とどの組織とを組み合わせるかとか、どの人をどの組織に帰属させるか、といった、組織論が主になることが多いことも否定できない。実際、今回の後期課程改革に関する議論でも、正面に出ていたのはもっぱら組織論であった。議論を導いていたのは、大学院の重点化に伴って行われた大学院の再編に対応するように後期課程も改革すべきだという主張であった。複雑な三層構造をなしている駒場の教育、研究組織を効率的に運営するにはできるだけねじれの少ない組織形態にするのがよ

いのは明らかであり、この種の議論が説得力をもったのは当然のようにも思える。科学史・科学哲学に関していえば、大学院では広域科学専攻の相關基礎科学系で、基礎科学科第一の教官を含めた物理、化学を専門とする教官と一緒に組織に属することになった以上、後期課程でも同じ教官集団を母体にした学科を運営することが効率的に見えるのも当然である。

しかしながら実際の改革の過程はそれほど単純なものではなかった。大学院の場合には、教官単位の研究室の独立性が高いので、異なった学問分野同士が一緒に組織に属することになっても、かなりの程度の融通性を残すことができるのに対して、学部教育の場合には、カリキュラムひとつとっても学科としてのある程度の統一性を形成するのに、どうしても教育理念、学問理念そのものにまで踏み込んだ議論が必要となってくる。そのため、改組の過程で、随分突っ込んだ仕方では教育理念や学問理念に関する議論を先生方のあいだで行うことになった。「学際性」を実現しようとするのがどれほど厳しいことかを多くの教官が実感したということもできる。

そしてまたこの過程は科学史・科学哲学という学問自身の鼎の軽重が問われる過程でもあった。科学史・科学哲学という学問は、科学とは何であったか、何であるのか、何であるべきかという問題をテーマとしてきたものだからであり、実際のカリキュラムの編成、組織の編制の議論を通してこれまでの学問的成果が問われることになったからである。その過程で痛感したのは、学問が決して理念や理論のみでできているのではなく、かなり具体的な方法論に支えられ、その方法論も個々の人間の思考のスタイルやさらには生活のパターンとして実現しているということであった。思考の内容を変化させることは可能であるが、思考のスタイルを変化させることは容易ではない。場合によっては、後者は学問分野の最も中核的なものに関係しているからである。したがって、現在の時点では新しい基礎科学科はいまだ異なる思考スタイルをもった「他者」同士がごちなくひとつの学科を形成しているという様子を呈している。そしてこの「ごちなさ」は、今後もなくなるのではないかと思われる。というのも、まさにこの「ごちなさ」のなかで、そしてお互いを他者同士として尊重しあいながら、徹底的に学問論や教育論を議論することによって、それぞれにとって他の場所では得がたい刺激が得られと思われるからである。このようにして科学史・科学哲学は新しい環境のなかで「意図せざる仕方」で新しい思考のスタイルを身につけて行くことになるだろう。少なくともこの点で科学史・科学哲学分科にとっては、今回の改組は学問論的に見ても大きな意味をもつ新たな出発点であると言えよう。

(科学史・科学哲学分科主任 村田純一)

II 教養学科から広域科学科へ

このたびの改組により、旧教養学科第一・人文地理学分科は広域科学科人文地理学分科となった。後期課程におけるこのような改組は、実質的には大学院における改組に連動するものである。広域科学科における後期課程教育の運営は、大学院教育（広域科学専攻広域システム科学系）との密接な関係を保つとともに、後期課程六学科の一部として、従来の教養三学科の実績を生かして、相互の有機的連携をも維持している。

改組により、長い伝統と実績を持つ「教養学科」の名称は消えたが、旧教養学科第一・人文地理学分科が旧教養学科（とくに教養学科第一）における文理横断的教育の理念に寄与してきたとの自負を継承している。すなわち、このたびの改組によって人文地理学分科が単純に「文科」から「理科」に移ったというのではなく、すでに旧教養学科において志向していた文理横断的教育理念を発展的に継承し、改組後の広域科学科人文地理学分科においても、共通科目や外国語などのいわば「文科」的トレーニングを引き続き重視するとともに、野外調査や、コンピュータ時代に即応したより高度のデータ分析をはじめとするいわば「理科的」トレーニング

を重視して、旧教養学科第一・人文地理学学科における文理横断的教育方針をより一層発展させるように努めている。

(広域科学科人文地理学学科主任 田辺 裕)

III 教養学科第1(人間行動学学科)から生命・認知科学科(認知行動科学学科)へ

教養学科第1の4番目の分科として、人間行動学学科が第1期学生を迎えたのは1986年のことであった。以来、十二支をちょうど一回りしたところで、この分科は生命・認知科学科の認知行動科学分科へと衣替えすることになる。

この組織変更には、実は、単なる衣替え以上の大きな意味がある。日本の大学教育において心理学系と生物学系のコースが同一学科で併存して設置されるのは、おそらく、本学科が初めてのことである。そして、明治以来、久しく文科系の学問として位置づけられてきた心理学は、本学科において初めて自然科学の一領域であることが明確に宣言されたのである。心理学や認知科学が生物学と同じ組織の中で教育されることは、欧米においてはごくありふれたことなので、わが国でそうでなかったことがむしろ不思議なくらいである。学部間の壁が厚いことや、旧一般教育で心理学が人文科学に確固として分類されていたことが、自然科学としての心理学の制度面での誕生を妨げてきたのであろう。

もちろん、人間の精神作用を対象とする学問である以上、その教育において人文・社会科学の素養を磨くことがおろそかにされてはならない。他方、人もまた自然界の一員であるという認識がなければ、人を対象とした科学研究は成立しない。新しい生命・認知科学科においては、この二つの要件をバランスよくみたとすようなカリキュラム編成を目指した。

まず、認知行動科学分科の学生は後期課程の共通科目と外国語の履修が一定範囲で義務づけられ、人間および人間社会にかかわる教養の深化が求められる。すなわち、新分科においても教養学科の伝統は継承されることになる。また、これらの科目は他学科生と共に学ぶことになるので、学科間交流が促進されることも期待できる。さらに、本分科の教官自身が二つの共通科目(「人間行動学」および「認知の成立」)を担当することにより、他学科生に実証的人間観や精神作用の客観的記述などを伝えることになる。

第二に、学科内の共通科目が必修科目として開講される。これは他の学科に見られない生命・認知科学科独自の特徴であり、基礎生命科学と認知行動科学という二つの分科がたんに並置されているのではなく、二分科が実際に相補的に教育にかかわることを示すものである。具体的には、「生命科学概論」「認知脳科学概論」「遺伝学概論」の3科目が両分科生に対して同時に講義され、共通の基礎が養われることになる。

第三に、認知行動科学の新しい方向性を示す専門科目が多数用意されている。とくに、他学部心理学教育では開講されていないような領域横断的な科目が積極的に展開される予定である。

認知行動科学分科への進学は文科からも理科からも可能であり、その割合は約半分ずつになるものと予測される。このように、本分科は研究対象のみならず、教育においても、学生構成においても、文理の潮がちょうど混じり合う所である。まさに駒場の学際性を代表するようなこの分科で、新しい発想が生まれ、そこから文理を縦横に駆けめぐる人材が輩出することが期待される。

(生命・認知科学科認知行動科学分科主任 長谷川壽一)

2. 教官組織の再編

Ⅰ 人文科学科から広域科学専攻生命環境科学系へ(心理・教育学部会)

周知のように、わが国の心理学研究は、明治期以来、伝統的に文科系の学問と位置づけられてきた。日本で初めて心理学研究室(実験場)が開設されたのは、1903年、東京帝国大学文科大学においてであった。以降、日本各地の帝国大学の文学部に心理研究室が誕生していった。当時は哲学との関わりが深く、心理学研究は哲学科の下位分野として位置づけられることも多かった。心理学が対象とするものは、人の精神作用であり、それは哲学の一問題であるとみなされたのである。戦後、新制大学に移行し一般教育科目が制定されると、ほとんどの大学で心理学は人文科学の選択科目となり、心理学は文系の学問であるという位置づけがさらに固定化したといえよう。

しかし、組織ではなく研究の実情をみると、20世紀の心理学は時代を経るとともにますます自然科学的方向へと傾斜していった。実体の定かでない意識や精神よりも目に見える測定可能な行動を研究すべきだと主張した行動主義心理学や、人の認知機構をコンピュータアルゴリズムになぞらえた情報論的アプローチ、脳波や筋電位などの生理反応を指標に用いる生理心理学的研究、統計的手法を駆使した数理研究などがその流れを加速していった。1970年代以降、主流となった認知心理学は、行動だけでなく心や精神そのものを対象とした研究を復活させたが、方法論的には反証可能な実験や観察に基づくものであり、内観報告のみにたよる思弁的研究に戻ることはなかった。

このような背景の下、大綱化に伴い一般教育科目の制約がはずされ、前期課程教育の見直しが始まると、教養学部心理学教室のスタッフはより現代的で実情に即した心理学教育のあり方の検討を開始した。そして、旧来の文理の枠にとらわれない学際科学としての心理学を目指し、総合科目D(人間・環境)を舞台に、科学的・実証的なこころと行動の研究の理念と成果を学生諸君に伝えることにした。「心理学」から「認知行動科学」と衣替えた新科目は、幸いにも、多くの学生諸君に受け入れられ、旧課程をはるかに上回る履修者を迎えることができた。

前期課程改革に一步遅れてスタートした大学院重点化構想では、専門教育における組織の位置づけが問われることになった。多くの議論の末に選ばれたのは、生命現象を科学的に探求する生物科学、身体運動科学との連携の道であった。心理学を研究するコースは学内の文学部と教育学部にも存在するが、他学部ではまねのできない駒場ならではの研究環境を生かすには、隣接する自然科学分野と積極的に交流し、心理学が本来的に内在する学際性をさらに押し進めていくことが重要だ、と判断したのであった。専門分野が近い教育学教室の教官もこれに合流した。当時のスタッフの専門分野は、脳科学、精神物理学、精神医学、動物行動学とそれぞれ生物科学と大きくオーバーラップする領域であり、自然科学へ移行する障害や抵抗は少なかった。

生命環境科学系が発足してほぼ3年がたった現時点で、われわれの選択が賢明なものだったかどうかを自己点検するならば、おおむね成功だったと評価できるだろう。基礎生命科学や身体運動科学と合同で行うさまざまな活動(広報活動、入試、研究発表会、論文審査など)を通じて、駒場における生命科学者の連帯感が徐々に育まれてきた。系の内規など新たな約束事を作る過程では、従来のしきたりの相違から意見の食い違いが生じることもあったが、議論を重ねることによって新しい伝統が生み出されてきた。研究者だけでなく、院生同士が相互に討論する機会も増えていった。とくに近年進展の著しい認知脳科学の分野ではボーダーレス化が進んでいる。さらに最大の収穫としては、まもなくスタートする生命・認知科学科という新しい後期課程のコースの誕生をあげることができよう。

他方、失ったものといえば、なによりもまず旧人文科学科教官との交流である。自然科学として位置づけられるとはいえ、人間を対象とする以上、人間理解の教養は欠かせない。方法論は異なるものの、かつて哲学、人文地理学、文化人類学、歴史学、国語・漢文学の諸碩学が、

さまざまな機会にて聞かせて下さった含蓄深い人間観は、こころを研究する者に基本的な視座を提供して下さったのであるが、最近はそのような機会がめっきり減ってしまった。3層構造がもたらす膨大な教務・学務負担ゆえに、ゆとりのない毎日を送らざるをえず、教養学部にいながら教養から遠ざかっていくことはもどかしい限りである。

(心理・教育学 長谷川壽一)

II 体育科から広域科学専攻生命環境科学系へ

大学院重点化にともなって、旧体育科は「スポーツ・身体運動部会」という前期教育担当の部会名に名称変更するとともに、大学院組織としては、広域科学専攻生命環境科学系の所属となった。生命環境科学系は、その研究内容や教官の所属する前期部会の関係から「基礎生命グループ」、「心理・教育グループ」、「身体運動科学グループ」に分けられ、旧体育科の教官は、運動適応科学講座及び認知行動科学講座を担当しつつ「身体運動科学グループ」としての枠組みをもって、研究・教育活動を実施している。

旧体育科では、旧前期課程教育カリキュラムのなかで、4学期間必修であった体育実技及び必修科目としての保健体育講義を担当するとともに、3、4年生のための選択実技授業（於：本郷御殿下記念館）や教育学研究科での大学院授業を兼担して行ってきた。また、こうした授業のほか、課外活動でも利用されている体育館やグラウンドの管理、さまざまなスポーツ行事への協力などを行ってきた。また、駒場の旧体育科の教官は、盛んな学会活動に加え日本のアマチュアスポーツの総括組織である日本体育協会やスポーツ組織の数々の委員会のメンバーともなっており、日本のスポーツ界と強いかかわりをもってきた。また、独自の研究会を開催したり、研究会の主體的役割を果たして、体育・スポーツ科学研究の先駆的役割をになってきている。

大学院重点化によって創設された「生命環境科学系」では、「DNAから人間まで」というキーワードのものに、生命科学、人間科学、運動科学を網羅する広い範囲の研究を組織的に展開することができるので、身体運動にかかわる研究分野に大きな広がりや深さが増加したといえる。

特筆すべきは、身体運動にかかわる大学院が駒場にできたことによって、教育学研究科の枠をはずれ、広域科学専攻のもとで自前の大学院学生を指導できるようになったことである。大学院への入学志願者は、大学院設立以来合格者の3～4倍の倍率となっている。

生命環境科学系ということから、体育学や教育学関係の体育系大学の出身者にこだわらず、理学(数学、物理、化学)、基礎科学、薬学、文学…など、出身学部が多岐にわたるところからの合格者が多く、近年のスポーツ科学の人気の高い学問分野の人々にわたっていることがうかがえる。

体育・スポーツ科学、身体運動科学、健康科学、体力科学、運動生理生化学など、人間の運動や生存、適応に関して研究すべき課題は数限りなくあるので、大学院生の研究活動にも熱がこもっている。

現在、身体運動科学グループ所属の大学院生は、博士課程27名、修士課程24名の51名であり、入学志願者には現役の大学生、大学院生ばかりでなく、社会人の中にも多い。

21世紀は、高齢化社会とともに人間の健康や生存、さまざまな身体活動、芸術、芸能を含めて、広い意味で「身体」そのものや、「身体を介したさまざまな活動」についての興味や、社会的関心が高まると考えられる。学問は、基礎研究とともに、社会的需要に答えられる実学的研究の双方が同時併行的に進行されることが望ましい。特に旧体育科が、生命環境科学系に所属することによって、基礎研究の面で学問的交流を広げることができ、大学院レベルでの教育・研究を含めて大いに益するところが大きい。しかし、大学院レベルの教育を中心にした考え方に立つと、基礎研究が重視されることにより、いきおい実学的な側面がおろそかになる傾向になりやすいので、この点には十分な配慮が必要である。

旧体育科は、大学院重点化によって大学院組織となったが、前期課程学生のための、身体活

動、実技実習を含む「スポーツ・身体運動」「身体運動科学」「身体運動科学実習」の授業を重視するとともに、スポーツ系の課外活動への支援をおろそかにすることができない。

大学院教育は、いわば「身体運動科学」に関する専門家の養成に携わるものであるが、それとは別に、東京大学に入学した全学部学生を対象にした「身体」への教育を重視しなければならない。それは、「言語知」に対する「身体知」という立場からの教育活動である。

大学院重点化の完成にともなって、教養学部1、2年生の「身体知」の教育をどのように発展、充足してゆくかという努力は、「スポーツ・身体運動部会」としての大きなテーマである。研究教育の基礎と実践の発展は、「身体をあつかう学問」の、いわば車の両輪をなすものであり、そのバランスには今後大いに努力すべき課題も多い。

(スポーツ・身体運動部会主任 小林寛道)

III 人文科学科から広域システム科学系へ

このたびの改組により、旧「人文科学科人文地理学教室」は「広域システム科学系人文地理学部会」となった。旧制度では、「教室」が人事・予算・研究及び前期課程教育の基礎単位であったが、改組後は、「専攻・系」が人事・予算・研究の基礎単位となり、新たに「部会」が前期課程教育の基礎単位となった。前期課程教育及び大学院教育における改組後の人文地理学部会の現状は次の通りである（後期課程教育については別項参照）。

(1)人文地理学部会は、そのスタッフ全員が広域科学専攻広域システム科学系に所属するとともに、後期課程において広域科学科人文地理分科を担当しているの、事実上、系・学科内の下部組織としても機能している。その結果、旧制度においては、人事・予算・研究及び前期課程教育が人文科学科、後期課程教育が教養学科第一、そして大学院教育が理学系研究科地理学専攻というように、それぞれ別々の組織に所属していたのに対して、改組後には、それらの大部分が広域科学専攻広域システム科学系・広域科学科に統合され、前期課程から大学院に至る各レベルでの教育に関連する諸業務を一層効率的に進めることが制度的に裏付けられるようになった。（ただし大学院教育については、当部会のスタッフは、本務としての広域科学専攻広域システム科学系に加えて、従来通り、理学系研究科地理学専攻も担当している。）

(2)人文地理学部会は、前期課程教育における基礎単位として、文科生に対する方法論基礎（人文科学基礎・人間Ⅰ）と、文科生・理科学双方に対する総合科目D（人間生態学、地域生態学、社会環境論）を担当している。これらの科目はいずれも、いわば「文科」的な人文社会現象を対象にしつつも、それらを「理科」的な方法で分析・考察するという、人文地理学の本来の特性を反映しているものであり、前期課程教育の重要な柱の一つである文理横断的教育の一翼を担っていると自負している。これらの前期課程科目は、旧制度において担当していた「人文地理学」を発展的に継承するものであるが、改組後は文理横断的科目としての位置付けをより一層明確にすることができるようになったといえる。

(3)大学院教育では、人文地理学部会のスタッフは広域システム科学系に所属している。この系の前身の一つである旧広域科学専攻（旧基礎科学科第二）も、すでに狭義の自然科学の枠にとどまらない学際的な教育・研究を志向していたが、このたびの改組によって人文地理学などさらに多彩な分野のスタッフが加わり、その学際性を一層推進できる条件が整備された。人文地理学関係のスタッフ及び院生は、これらの多彩な分野との日常的な交流を通じて多くを学ぶとともに、人文地理学の立場からこの系の大学院教育の学際化に大いに寄与すべく努力している。

(人文地理学部会主任 谷内 達)

3 キャンパス外とのコミュニケーション

インターネットとは別に、通信衛星を用いた、他大学等との共同による新しい教育・研究システムが1996年度より始まった。東京大学では駒場キャンパスの局とは別に、本郷（工学部）、弥生（農学部）に局がある。駒場の局の運営委員会からの報告である。

SCS運営委員会

SCSとは、「スペース・コラボレーション・システム」(Space Collaboration System)の略称であり、衛星通信大学間ネットワークがその内実である。本委員会は駒場地区におけるSCS事業の円滑な運営を図るべく、評議員1名、学部長補佐2名、各専攻、系よりそれぞれ1名から成る委員で組織された委員会で、教養学部から1名が全学的組織であるSCS事業に関する研究会に出席することにより、全学との連携、協力態勢を組むことになっている。本委員会は1996年8月9日、第1回の会議と同時に発足した。

SCS事業は、遠隔地の大学、大学院、高専、研究所等の間で同時双方向の動画、音声の送受信を通じて、相互授業、合同授業、あるいは合同の研究会を実施し、メディア技術の発展に伴った新たな高等教育・研究を推進し、動画を含む映像、音声、文字情報等の多様なメディアを活用した高度情報化社会に相応しい教育および研究活動の方法、内容についての研究を推進する目的で組織されたものである。この事業は、文部省の下で、大学共同利用機関である放送教育開発センターが中心となって、1996年10月より開業した。

具体的には、千葉の幕張にある放送教育開発センター設置されたHUB局（親局）と全国各地の国立大学及び国立研究所等、約50箇所に設けられたVSAT局（Very Small Aperture Terminal 子局）とを通信衛星を介してネットワークで結ぶというものである。東京大学では、本郷地区（工学部）、弥生地区（農学部）、および駒場地区（教養学部）の3地区にVSAT局が設置されている。教養学部では現在言語情報科学専攻の教育・研究と前期外国語教育のためのLL教室が集中している10号館の屋上に衛星との通信用のパラボラアンテナが設置され、屋内装置は、同館3階のL301号室に収納されている。

利用方法であるが、利用希望者は、教養学部総務課研究交流掛に用意されている「SCS利用申込書」に必要事項を記入して申し込む。本委員会は、この総務課研究交流掛と10号館管理委員会と常に密接な連携を保ちながら機能している。

当面の課題としては場所と人手の問題がある。L301号室は元来、言語情報科学専攻および各外国語部会の会議室として、また小規模な講演会等に使用されてきたが、ここがSCSによる授業や研究会にも利用されることになり、使用頻度が一段と高まってきている。本来の使用目的とSCSのための使用希望とが重複し、SCSでの利用ができない事態も起こっている。通常の授業用の教室にSCS設備が設置された工学部や農学部でも同じ悩みを抱えており、SCS専用の部屋の新増築が切望されるところである。

また、SCSによる授業や研究会の円滑で効果的な実施のためには事前の周到的準備とリハーサルが不可欠であるが、そのためにはSCS専門の技官の配属が必要である。現在は、従来前期外国語教育のためのLL機器およびスタジオ機器の管理を担当してきた技官1名がSCSの補佐も代行するという変則的な状態が続いており、SCSの利用頻度が増すにつれますます現員への過重負担が増えることは目に見えている。

以上のような重大な課題を抱えてはいるものの、SCS事業は既に始まっているデジタル通信、マルチメディアの普及による、従来にはなかった新しい教育・研究を現場で体験し、その試行



錯誤の中から、次世代の教育・研究環境の構築に大きく貢献するもの信じている。その運営に直接関わる本委員会の責務と意義は極めて大きいものと言える。

(SCS委員会委員長 鈴木英夫)

IV

駒場キャンパスで何を、 どのように学ぶか

大学生活は多くの学生にとって、高等学校までの学生生活と質的に異なるものとなる。その実感は後になって感じるものかもしれない。多かれ少なかれ、庇護のもとにいた生活から、独立した成人へと向かうのは単に法律上の問題ではない。自己を確立し、一人の人間として責任の取り方、そして他の人間に影響を与える力、他の人間から自分へ有効な影響を感受性を身につける時期である。知を人間、社会、自然から学び、これをもとに場合によっては働きかけ、場合によっては維持するために必要な自己の能力を高め、開発し、自己教育を身につけ、自己発見の楽しさを享受しうようになる時期である。大学生活で遭遇する教官を始めとする人々は自己を振り返り、あるいは日頃学生に接触することを通じて、授業では必ずしも述べられていない深い感慨を持って生きている。これらの方々よりその経験をもとに、学生に語りかけ、意見を述べ、そしてアドバイスを与えてくれるようお願いして書いて頂いたのが以下の原稿である。編集委員会で、一応整理・分類してならべてあるが、必ずしも表題にとらわれずにこの多様な価値観を味わってほしい。

1 大学生活を始めるにあたって

1. 学生委員会より

新入生の皆さん入学おめでとう。これから君たちはこれまでに比べて、いろいろな意味ではるかに自由な生活を送る事になると思います。それは学習の面では必修の基礎科目があるにしても、学習指導要領などには縛られない無制限の内容の選択範囲の広い講義群の存在であり、課外においては自由な時間が多く、サークル活動に参加しようとするれば、これもまた多様なサークルが君たちの参加を待っており、あらたなサークルを作る事もできるというものであり、不幸にして浪人するなどして二十歳に達していれば、酒もたばこも許されるという生活です。このような環境のもとで、君たちがどのように学習を行なってゆくかについては、この後で説明があるので、ここでは学習以外での駒場キャンパスでの生活についてふれたいと思います。

まず、君たちは自動的に学生自治会と学友会に入っています。自治会は君たち自身の手で、キャンパスでの生活をより良い物にしていくための組織です。大学での生活は、すでに存在するシステムに従って、受け身的に過ごすものではありません。(これは、学習についてもいえることですが。)残念ながら、現在の自治会の活動は代議員大会の出席者が非常に少ない等、あまり活発とはいえません。新入生諸君がこれを活性化し、大学での生活に対するより良い環境の整備に向けて多くの学生が参加するようになることを期待しています。

次に、学友会は主にキャンパス内でサークル等が活動するときに、その支援をしたり調整をしたりする組織です。キャンパス内の、時間・空間などの資源には限りがありますから、その利用の調整は重要です。また、学生会館の利用に関しては、学生会館委員会が調整を行なっています。

さて、前に書いたように、大学での生活は、かなり自由度の高いものです。しかし、これは君たちが何をしても良いという事を意味するわけではありません。大学は一つの社会を形成していてそこには当然最低限守るべきルールがあります。また、大学は閉ざされた社会ではなく、さまざまな意味で周りの社会と関連し、より広い社会に組み込まれていますから、そこでのルールも守らねばなりません。なかでも重要なのは、他人を尊重し、自分の行動が他の人の迷惑にならないようにするという事です。屋外での楽器練習で、講義や、近所の住民に迷惑を及ぼしたり、酒の飲みすぎで、救急車の世話になるなどはもっての外です。このような常識的なルールのもとで、君たちが充実した大学生活を過ごす事を私たちは望んでいます。

(学生委員会委員長 吉岡大二郎 相関基礎、物理)

2. Dear Students: 学生の皆様へ

Welcome to the University of Tokyo. I am very excited for all of you because of the many experiences and challenges that you have ahead of you. All of you are privileged, not just because you have entered one of Japan's most highly regarded universities, but, more significantly, because you have an opportunity that so many people throughout the world will never be given. To have the next four years to learn, to grow, to experiment, and to stretch your mind and imagination

is a chance that most of you will not easily have again. I hope that you take the fullest advantage of this time.

Most of you, initially, will probably be giving a great deal of thought to your studies. Having been educated at American universities, at both the undergraduate and graduate levels, I come out of a western tradition that holds as one of its ideals the Socratic method of learning through questioning, and I try to encourage this in my students. Asking questions, a lot of questions, is the beginning of learning. Some of the greatest minds — philosophers, scientists, writers, and artists — have made the contributions they have in large part because of the questions they have pushed themselves to ask and answer, inquiry that has taken them beyond their own limits. As you are attending courses, studying, doing homework, and preparing for exams, always ask questions. Don't sit passively and allow yourself to be "educated," but take the responsibility to educate yourself. The modern American poet Delmore Schwartz titled one of his major works of poetry In Dreams Begin Responsibilities, his main message to us being that we are responsible for knowing who we are and what we want to do with our lives, for making our dreams come true. No one can do this for us.

I encourage you to develop good study habits, to cultivate an inquiring mind. Go to classes, learn and think about what you are taught. When a teacher gives you an assignment, do more, go beyond it. Don't be satisfied with the easiest way of completing your tasks. The heart of the university is the library, so discover its many resources and use them often, not just for required work, but to explore your own interests as well. If you do only what is easy for you, you will lose so many opportunities to grow and stretch. If you develop this personally responsible attitude toward your education, you will teach yourself to be a lifelong learner, a quality that will continue to enrich you long after you have graduated from the university.

Because of my educational background, I have two areas that I teach in; one is English language, and the other is art history. Although these two fields are quite different, the basic principles with which I approach teaching them are the same. Before entering this university all of you spent a lot of time studying English. Many of you have developed a particular interest in this language and want to increase your fluency. Students very often ask me what they can do to improve their English, and although my answers vary depending on the individual student and her or his goals, I give advice that applies to anyone learning any foreign language. English is a tool of communication, and if you study it in that way you will find the endeavor much more enjoyable. In your English classes open your mouth and speak often, even in those classes which do not specifically emphasize oral English. Practice makes perfect. As a teacher of American English, I am keenly aware of the flexibility of the language, so I encourage you not to be afraid to make mistakes. They are an inevitable part of your learning. Take every opportunity to use the language, because the more you do so, the more comfortable you will become with it. Over time and with your conscientious efforts, your mistakes will begin to disappear. Have confidence in your abilities.

At the University of Tokyo you have many resources available to you, not least of all your teachers. Use us. Most of us are in this profession because we love our chosen fields and wish to share our knowledge and enthusiasm with students. I always encourage my students to talk to me outside of class, and I value this exchange because I learn so much from students. I encourage you to talk to your teachers, especially if you have any problems or specific concerns, but also

when you simply feel like discussing various general issues. The faculty at the university cares about students, and we want to do all that we can to help you define and achieve your goals. We are there to help in that task, but the real responsibility is yours.

Finally, enjoy your university years. Be serious, study hard, have fun, and challenge yourself in a hundred ways. Don't be satisfied with mediocrity. As the famous nineteenth-century American philosopher and essayist Ralph Waldo Emerson said, "Hitch your wagon to a star."

(Sandra K. Lucore 地域、英語)

3. 駒場キャンパスの実感

駒場には「居場所がない」「人と会う場所がない」というのは、おそらく多くの学生の実感だろう。駒場には万を越す人々が、いろいろな部分に属して活動しているが、膨大な人口のわりにスペースは狭く、それらは個々に分割されてしまっている。他へのコミュニケーションの回路が少なく、いわば「広場」や「居間」がどこにもないのである。ということはまた、そういう空間をつくり出すような社会資本全般がないということでもある。これは教師の研究・教育のレベルでも大きな問題だが、より短期に通過する住人である学生にとっても、やはり大きな問題である。そのことが学習や思考に及ぼす有形無形の影響は予想もできない。

欧米の大学に行くと、その学内が「美しい」ことに何かほっとしたような、しかし愕然とするような気持ちをもつことが多い。その美しさが感じられる部分はたいいてい、人と出会ったり、食事をしたり、散歩して深呼吸したりする場所であり、また本を読んでしんとした時間と背後の歴史を味わう場所である。また大量であっても気持ちよく整理されたアルヒーフやアクセスのよい開かれたネットワークがもつ合理的な知性の場所もやはり美しい。そうしたもののによって、私たちは、自分たちをとりまく大きな自然や、勉強していることの背後の遠くから蓄積された文化、生きてきたまた生きていく人々を感じる。また人との間でひろやかな気持ちで生き生きした議論をしようという気になる。こうしたことを可能にする美的環境が「大学」になっているなら、たしかに大学は「知的創造をうたうにふさわしい場だといえるだろう。

残念ながら、現在の駒場はとうてい、そうした美にまで表されるような価値感覚を宿した場をつくり上げている状態ではない。そのことを私は今のところ悲しむほかはない。が、それでも「暮らしは低くとも想いは高くする」ことはできるだろう。またささやかな美をつくることもできるだろう。そのためには一体どうすればいいだろうか。

個々に言いたいことはいろいろあるのだけれど、ここでは抽象論でいおう。まず必要なことは、少なくとも、私たちの内部や周囲をこれ以上「荒ませない」ことだ。私たちはあわただしく急ぎながらじつはかなり鈍感になったり投げやりになったりしている。そこから抜け出る必要がある。が、そこから抜けようとしたら、「よくない」状態をはっきり感じつづけことにもなるから、むしろ不安になり、余計いらいらする。では、鈍感にも苛々にも陥らないためにはどうするか。結局、もっと積極的に「よりよいもの」を感じ、知るほかはない。美しいもの、より本当のものを、自身で知ったり実感したりすること。それが何より重要だし、それこそが人や自分を動かす力になる。

でも、いま無いものをどうして感じ・知ることができるのか？ これは意外に大きな問題である。「知らないものをどうして知れるのか」というのは古来議論されつづけた「学」のアポリアだった。しかし実践的な解答は可能である。というのは、十分に知らないものでも、人は、うすうすと知ることができる。たましいをふりむけることはできる。つまり希望や憧れや畏敬をもつことはできる。そのためにこそ人には想像力がある。とくに、若い、内にエネルギーが

動いている人たちが、「よいもの」への想像力によってそのエネルギーに道を見出したら、大きな変化が起こる。

しかし、その「よいもの」とは何か。ここに至ると、私は容易に答えることはできない。けれども私はあえて、「そのよいものは確かにあるのだ」と、世の流行とはちがって実在論の立場にたって言いたい。というのも、少なくとも、私たちのまわりは依然としてとても「貧しい」からだ。こんなに貧しいにもかかわらず、私たちのまわりには、うすっぺらな消費や遊び、取り憑かれたような表象の跳梁だけは事欠かないような仕組みになっている。そこに騙されてはいけない。リアルなものなど無いのだという言説を楽しめるような状態にまで私たちはそもそも至っていない。そんな言説は、この現状下では、じつは私たちを貧寒なままにしておくための欺瞞としてしか働いていないのだ。

「駒場は教養」という言い方はいっこうに恥じる必要のないものだ。というのは、昔ながらの教養主義やディシプリンを持続・再興すべきだという保守趣味を強調したいためではない。無効なものは解体されてよいのだし、変化をおそれてはならない。しかしそれでも、「教養」は必ず存在しつづけるだろう。「よりよく」自身を培い作り上げていくという意味での、私たちの身や心、感情や知識にとっての教養の理念は生きつづけるだろう。無くなれば無くなるほど、変化があればあるほど求められるのが人間的なものである。そしていずれ新しい教養の時代がくるにちがいない。駒場は来るべき教養への試練の場、いや希望の場である。

(黒住 真 地域・国文・漢文学)

2 大学は、高校までと何が異なるか

1. 大学での授業とは

私が高校1年のとき、生物の先生が最初の授業で話してくれた内容がとても印象的でした。それは、先生が10代後半に「自分は何のために生きているのだろうか?」「社会は自分を必要としているのだろうか?」と、真剣に悩んだ話です。時は、第二次世界大戦以前の昭和10年代で、今から60年も前のことになります。その先生だけではなく、同じ様な悩みを持った青年がその頃はたくさんいたらしく、中には日光の華嚴の滝に飛び込んで自殺をした一高生もいたそうです。

10代後半に、私はそれほど思い詰めた経験はありませんが、それでも大学に入りたての頃は自分の人生についてあれこれ考えたことを記憶しています。私が大学に進学した昭和36年頃は、今になって思えば大戦の後遺症が薄らいで、日本は高度経済成長に向かって突き進み始めており、欧米の生活水準に追いつくという目標がはっきりしていました。経済も拡大し、新しい仕事も増えていて、社会が当面の目標をはっきりもっていたことが若者を真剣な悩みから開放したように思います。歴史を見ますと、昭和10年代は経済が落ち込んで、仕事も必ずしも多くなく、社会的に将来が見通せなかったようです。

さて、時は移って、現在はどうでしょう? 大部分の皆さんはおそらく昭和10年代の若者のような深刻な悩みは持っていないでしょう。それは、一面では幸せなことですが、別の面では大変に問題だと思えます。といいますのは、昨今、良く言われるように今は社会の進んでいく先が良く見えないからです。これは、私が皆さんの年頃の社会の状態とは全く違います。今考えますと、私が10代の後半の頃は人々は実にはっきりした社会の将来像を描いていました。ただ、冷静に考えればそうなるかどうかは分からなかったのですが、とにかく人々は疑うことをしませんでした。将来がはっきりしていないことは、本当はとても不安なことですが、現在そうでないのは、社会の将来がはっきりしていないことを皆さんがあまり自覚していないからだと思えます。これは、これまで長い間にわたって景気も良く不安の無い社会が続いたからでもあります。確かに、ここ数年は不景気で、仕事も限られています、その前の景気の良さが長く、規模も大きかったために、その良き時代の影響で現在の深刻さを認識できない面があります。そのことは大いに感謝すべきですが、大学に進んだ今、これからの社会が進むと思われる方向を各自でできるだけ早い内に探って実状を良く認識し、その上で自分の生きがいの道を考えてみるのが大事です。

大学の前期課程

皆さんを待っているのが大学の前期課程です。自分の持っている興味を考え、自分の力を試し、社会が進んでいる方向性を探り、この時期に各人が主体的にしっかりと考えた考え方を持つことがとても大事だと思います。そうした視点で、前期課程のカリキュラムを眺めると、皆さんの興味を伸ばし、悩みを解決する助けになりそうな部分を随所に感じとれるはずです。

大学に入学するまで、皆さんは限られた時間に物事を理解し、内容を記憶するという訓練に多くの時間を使ってきました。東京大学にはそうした能力が特に優れた人達を選ばれて入学しています。速やかな理解力と、記憶力は確かに重要な資質ですが、それだけでは十分ではありません。例えば、皆さん全てが敏捷かといえば必ずしもそうではないでしょうし、良くいわれる独創性が優れているかといえばそうとも限りません。ただ、「ブタもおだてれば木に上る」の

例えにもあるように、自分は優れているのだという自信を持つことは大変に重要で、それはバネとして不得手の領域の克服に大いに活用すべきです。それ以上に、自分が得意とする部分を大いに伸ばして貰いたいと思います。

そして、それらを生かした社会での自分の活躍の場を考えてみることです。前期課程を自分の考えによって前向きに送り、2年生の後半の進学振り分けでは、点数の高低だけで一喜一憂するのではなく、自分が将来社会に出たときに働いてみたい分野を意欲的に選択できたかどうかを考えるようであって欲しいと願います。

大事な視点

さて、学ぶ場合ですが、前期課程でとても大事だと思われることは、皆さんが社会に出ていくのが、早くても4年後だということです。そして、その後、現状の日本の状態をそのまま当てはめて考えれば、30～40年は現役で働くことになります。従って、少なくともその間の日本や世界の状況になるべく早い時点（できれば今）で予想しておく必要があります。もちろん、そんな先のことを予想して当たるかどうかは分かりませんが、今ではなく、将来を考えるという癖をつけていくことが大事です。現在、国内外で盛んに言われていることは、価値観の変更の必要性です。つまり、現在良いと考えられていることが、将来は良くなったり、あるいは悪くなったり、また、今は全く評価されていないことが重要になったりするということです。自分が活躍する時代に通用するような価値観を見きわめることが重要です。それには、できるだけ本質的な価値観を探り当てていくことが大事でしょう。私は自然科学を専門としますから、それに則って本質的な問題を考えますと、人が今後も地球上を生活の拠点としていく以上は、私達は地球の大きさという限界を認めなくてはならないということです。そこでは当然のことながら物質的な欲望を無限に追求することは不可能です。したがって、地球の有限性を認めた上での価値観を強く持つ必要性があります。

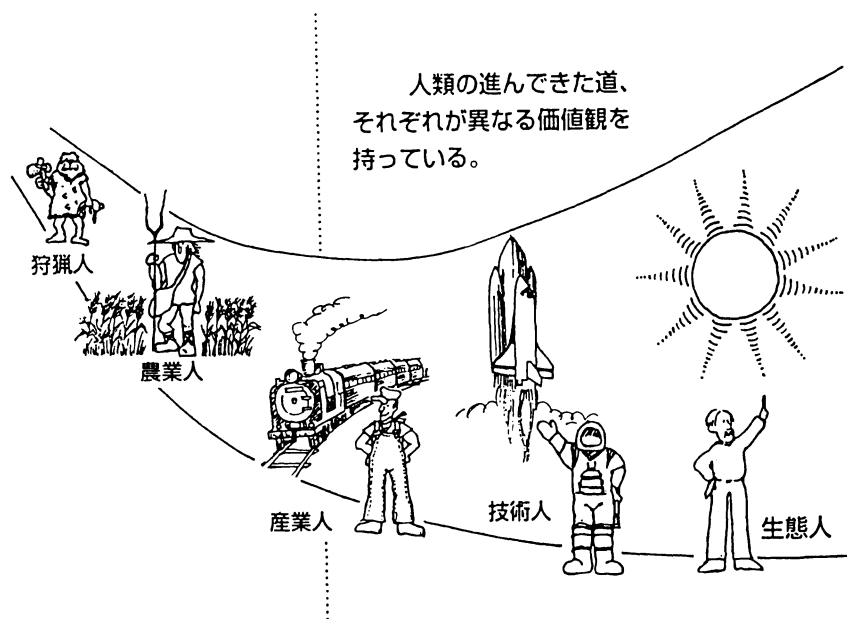


図 現在の「技術人」から「生態人」への知的進化の必要性

図に示したように、人は原始人から始まって、狩猟人、農業人、産業人、と知的進化を遂げて来、現在は「技術人、technocrat」に到達しています。大戦後の私達日本人は、まさに技術人の本領を発揮してきました。それはある意味で明治維新政府が行った大変革の結果ととらえることができます。別の言葉で言えば、欧米化ということにもなります。しかし、技術人も地球上に留まる限り有限の壁を越えることは困難です。そこで、地球上で生物として振る舞ってい

く道を改めて考える必要が出てきました。しかしそれは、江戸時代の生活に戻るとか、森に入ってオランウータンのようになるというわけではありません。自然の一員としての自覚を持って、知識や技術を駆使した新しい社会のあり方が考えられます。私は、こうした考え方になった人を「生態人、ecocrat」と呼ぶことを数年前に提案しました。興味あることは、私達日本人は今では技術人の先達であった欧米人以上に技術人化したきらいがあるということです。昨今、私達日本人の技術人化の行き過ぎが欧米から非難され始めたことも十分認識しておくべきことです。

だからといって、私は皆さん全員に生態人になりましょうといっているわけではありません。賛同する人は共に考え方を磨けばいいし、他の考え方の人はそれを主張していかなければいいのです。どれをとるかは、その時代の人達の選択にかかっています。農業革命や産業革命が人類にとって本当に良かったかという、必ずしもそうとばかりは言いきれない部分があります。しかし、選んでしまったものにたいしては、知恵を絞ってできるだけ良いと考えられる方向に持っていく努力をする事だと思います。

社会の将来にたいする面白さと不安

先ほど、日本のこれまでとこれからの社会について紹介しました。つまり、過去50年ばかりを見ますと社会の目指す方向がはっきりしていたけれども、これからは必ずしもそうではありません。目指す方向がはっきりしないことに面白さを感じ意欲を燃やす人、反対に不安に思う人、様々だと思います。多分、これから当分の間は後者のタイプの出番が多くなりそうな感じがします。でも、前者の要素も社会には十分ありますから心配はいりません。

さて、皆さんは、どちらのタイプでしょう。

(高橋 正征 広域システム、生物)

2. 大学での勉強・授業・試験

「先生、期末試験はどの範囲から出るんですか？」これには参った。新一年生の講義の初日に
出た質問である。

一体、勉強に範囲なんてものがあるのだろうか。勉強は教わるものではない、自分でするものである。大学の講義なんて、別に出たくなければ無理に出席する必要はないのだ。

先の質問のことを同僚の先生に話したら、「君がそれまでの人生で学んできたことすべてだ。」と答えたそう。未熟な私には、咄嗟にそう答える術もなかったが、「我が意を得たり」と思った。

大学は知のデパートだ。いろいろな講義やセミナーが所狭しと並んでいる。どれを選ぶかは君らの自由だ。自分を鍛える上で何らかの役に立ちそうなものがあれば手に取ればよく、気に入ったものが無ければ無理することはない。自分でやった方が調子が良ければ、こつこつ図書館で勉強すればいい。いっそサークル活動に打ち込んでもかまわない。ただ、迷惑だから私語などの営業妨害だけはやめてくれ。ほらほら、他のお客さんが迷惑しているじゃないか。

だいたい、中学や高校とは違って、大学には学生をなんとか卒業させてあげようという意志は、まずない。極端な話、一学年に3000人もいれば、中には犯罪に手を染めて人生を棒に振るのもいるかも知れないし、病気や事故で死ぬ人だってきっと出てくるだろう。大学とは名前が付いているが、立派に現代社会の一部なのだ。その中で何を成し、何を学ぶか、それは自分できめることだ。

勉強をするという面で、一般の社会人に比べて大学にいることの最大のメリットは何だろう。それはおそらく、どんな分野を学びたいと思ったとしても、アドバイスできるような人

が必ずどこかにいて、直接に意見を聞くことができることだろう。そのような助言を求められることは、教官にとっても喜びである。また、忘れがちだが、大学生であるというだけで膨大な資料が比較的容易に利用できることもあげられるだろう。

誰しも、年をとるほど時間が早く流れるように感じる。一説によると、人間は自分がこれまで生きてきた時間を尺度として時間を計るので、同じ ΔT という時間でも、 T だけ生きてきた人にとっては、 $\Delta T/T$ として感じられるのだそうだ。これを積分すると、人生の様々な出来事は、logスケールで計るのが実感と合っているということになる。実際、自分が生まれた頃の記憶は無限の彼方に追いやられている。ちょっと話題がずれてしまったが、要するに、若いときの時間ほどより重みがあり、ゆめ使い方を誤らないようにすべきなのだ。これは君たちだけでなく、自分自身に対する戒めでもある。

(加藤晃史 数理)

3. 理論物理学者への道

大学へ理科系を目指して入ってきた人々の中には、将来物理を研究したい、とくに理論物理学を一生の仕事としたいと思っている奇特な人もいるかもしれない。(鉄腕アトムの天馬博士や、お茶の水博士に憧れて)。そこでこのコラムではまず理論物理学を研究している者の生態を述べる。次に、今後どのような進路を取ると理論物理学者になってしまうかということ述べてみよう。

まず理論物理学者の一日を追ってみる。

朝、大学に来てから、まずコーヒーを飲む。次に電子メールなどを読む。また、机に向ってやりかけの計算をしたり、コンピュータに向ってプログラム作りや結果の解析をしたりする。気が向けば、他の人の論文を読んだり、書きかけの自分の論文の続きを考えたりする。考えが詰まると廊下をふらふらする。

気分転換に昼ごろ飯を食べる。午後になると研究室の大学院生などが学校に出てくるので、彼らの計算がどれくらい進んだかひやかしに行く。大学院生に愛想をつかされると、居室に戻って自分の計算の続を行なう。考えが煮詰まると再び廊下をふらつく。またコーヒーを飲む。セミナーがあれば、出席してフンフンと聞いている。時たま、思いついたようにわけのわからない質問をしたりする。(これは大学院生も同じ。) 納得するまで引き下がらないことが、まあある。セミナーが大混乱のうちに終るとうれしそうにしている。夜になると家に帰る。夜遅くまで大学に残って何やらゴソゴソやっていることがある。

以上が理想的な生活である。これからわかるように、理論物理学研究者が日常行っていることは

- (1) コーヒーを飲む
- (2) 自分の計算をする、コンピュータに向う
- (3) 大学院生の計算について相談する (ひやかす)
- (4) 論文を書く
- (5) 他人の論文を読む、セミナーで他人の話を聞く
- (6) 廊下をふらふらする
- (7) 雑用をする

の7つの場合に分類される。もちろん、上から順番に重要度が高い。これが理論物理学研究者の生態である。

次にどのように人生の進路をとると、このような暮らしになってしまうのかと言う点について述べよう。

まず駒場の1、2年では必死に勉強する。もちろん、ここでいう勉強とは授業に真面目にでることではなくて、自分で納得するまで理解するということである。去年の講義ノートでもよいし、教科書の独学でもよいし、先生にしつこく聞いて理解してもよい。ただし多分試験一週間前では間に合わない。駒場の授業は基本的なものである、頑張ってやる。駒場の理科学科目(とくに必修)は、いずれも将来の研究のために必要不可欠な技術である。しかしそれ以上に大事なことは、理論的思考法を身につけるという点なのである。論理というのは、自分のアイデアを他人に納得させるための唯一の手段であるといってもよい。つまり将来の大研究のための基礎準備と考えて学ぼう。

さて、2年の進振りで学部が決まる。理論物理学をやるには、本郷の理学部物理学科・天文学科・地球惑星物理学科などがある。駒場にあるのは教養学部基礎科学科である。駒場の先生方は基礎科学科も兼任している形になっている。(この『駒場96』を参照)。学部でもひたすら勉強する。

4年生の夏に大学院の入試がある。理論物理の研究室を選ぶ。ここで将来どのような研究分野になるかほぼ決まるので、この際は慎重に選ぼう。分野としては大雑把に、素粒子理論、原子核理論、物性理論(固体物理)、量子物理学、数理物理、複雑系カオス、統計力学、流体力学プラズマ物理などがある。もちろん大学から大学院へ進むときに、他の大学へ移ってもよい。(アメリカではそれが普通であるようだ。)ちなみに私の研究室の出身大学もバラエティーに富んでいる。

大学院では今度はひたすら研究する。ここからが、教科書に書かれていない未知の分野を開拓する“研究”というものになる。大学院修士課程(2年間)の間は先生の指導のもとに研究することもあるが、修士論文完成後の博士課程(3年間)では、自らテーマを決めて考えて研究していく。ほぼ3年で博士論文として自分の研究の集大成をする。博士になったならば、一人前とみなされる。

博士課程の後半から職を探す。職としては、大学の助手・研究所の助手・企業の研究所などが考えられる。ただし企業に行くと、自分の好き勝手な研究をするというわけにはいかないこともある。企業に行くつもりになったならば、修士課程修了時で就職した方がよいと言われていいる。助手として採用されるには、それまでの研究業績が勝負である。

助手の間は、大学院の演習などを任されることがあるが、やはりひたすら研究する。研究室の先生と一緒に研究することも多いが、基本的にはもう独立した研究者である。途中で外国に1年2年行って、武者修業することもある。このような暮らしを続けて、だいたい5年ぐらい経つと、次の助教授を目指す。

助教授になれば、やはりひたすら研究する。こうなれば研究は、職業兼趣味と実益である。毎日が楽しくてしかたがない。(大抵はこの段階で婚期を逃す。)このような経過を経て、このコラムの初めの方に述べた暮らしとなるのである。

(小形正男 相関基礎、物理)

4. 生命科学に関するQ & A

Q：生命科学と生物学はどう違うのでしょうか？

A：生命科学というのは、生物を対象とする総合科学だと思ってください。生物の基本単位である細胞ひとつをとっても、その機能は1万種類以上の蛋白質の複雑なネットワークで維持されています。こうした複雑な系は、これまでの生物学、化学、物理学といった枠組みだけではとらえることができません。実際に、駒場で生命科学の教育、研究をしている先生方も、生物学科の出身者だけでなく、物理学科、化学科、生物物理学科、生物化学科などさまざまなパッ

クグラウンドをもっており、多彩です。前期課程における生命科学の講義も、生命を理解するにあたって基本となる現象の生物学的解説にとどまらず、それを化学あるいは物理学の概念で理解するということも重視しています。

Q：高校では生物学は全くやってきていませんが、講義についていけるでしょうか？

A：理科一類の学生は、入試では、ほとんどが物理と化学を選択しています。また、理科二類の学生でも生物を選択しているひとは、むしろ少数派に属します。こういう事実を前提に講義をしますし、講義の内容も生物学的な現象をひとつひとつ解説するという「高校の生物」のようなことはしません。講義の軸としては、個々の現象より、むしろ「分子」とか「エネルギー」といった概念が重要なので、高校で物理や化学をきちんとやってこなかったひと（特に、化学をやってこなかったひと）の方がたいへんだと思います。

Q：生命科学に関してはどんな勉強をすればよいのでしょうか？

A：生命科学は複雑な系を扱っているので、個々の現象や事実を覚えようとしたら大変です。大事なのは、そうした個々のことをつなぐストーリーです。そうしたストーリーを語る言葉が「分子」とか「エネルギー」とか「相互作用」といった概念になるわけです。生物のような科目では、暗記することが勉強するという事と同じだと思っているかもしれませんが、これは大間違いです。教科書に書いてある細かいことは、どこにそれが出てくるかさえわかっていることです。あえて覚える必要はないわけです。理解することは記憶することと違います。大筋や重要な概念を理解して、細かいことは教科書で確認すればいいのです。教科書も、あまり詳しいものよりは、さっと読めて全体の筋がつかめる小さいものを勧めます。最新の知識を詰め込んだ分厚い教科書もたくさん出ていて、それはそれで役に立つのですが、はじめて勉強するひとは、現象の海に溺れてしまう危険性があるのでお勧めできません。そういうものを勉強する前に、積み上げの必要な物理とか化学をきちっと勉強して基礎を固めておくことも大事です。

Q：将来は生命科学を専攻したいと思いますが、進学先としてはどんな学科があるのでしょうか？

A：理学部の生物学科、生物化学科、薬学部、農学部、医学部など本郷の学部、学科のほかに、教養学部の生命・認知科学科や基礎科学科生体機能分科などがあります。それぞれの学科で特徴がありますから、その学科の教官や学生などの話も聞いて、自分の興味にあうところを選ぶことです。

Q：21世紀はじめには生命科学というのはどうなっているのでしょうか？

A：水晶の玉を覗いてみると、「ヒトゲノム」と出ました。新聞や科学雑誌などで読んだことがあると思いますが、現在、ヒトの染色体に書かれている遺伝情報（A、T、G、Cの4文字だけで書かれている）を全部読みとろうというヒトゲノムプロジェクトというのが世界中の科学者をまきこんで進行しています。いま駒場に入ってきた諸君が大学を卒業して、大学院に入ったり企業の研究所に入る21世紀はじめには、染色体のなかの数十億文字が全部読みとられることになっています。アポロが月に行った前後で惑星科学が大きく変貌したように、ヒト染色体の中身が全部わかれば、生命科学もおおきく変わるでしょう。基礎科学への寄与もさることながら、こうした知識の医学的応用や工学的応用といった面が脚光をあびるかもしれません。

（須藤和夫 生命、相關自然）

5. 駒場で何をいかに学ぶか

大学に入ってから、できるだけ早く専門を決めて、しかるべきカリキュラムを通して専門家への道をどんどん進むのがよいとする考え方がある。この方針を採る大学は日本や外国に少なくない。一方、あまりに早い専門化は、視野の狭い人間を作ってしまう、あるいは発想の豊かさを育てることができないという反対論もある。いずれがよいか、教育を受ける人の性格にもより、甲乙はつけがたい問題である。

東京大学は駒場の2年間を設けて、学生に少し考える時間を与え、しかるのちに専門の道を選ばせる方針を採ってきた。したがって学生はこのような制度の利点を大いに活用するのがよい。

駒場の利点は文科系と理科系、その両方にまたがる諸分野、そして多種の外国語の授業がたくさん開かれているということである。私自身の昔も多彩な授業があったが、今はその何倍もの豊富さである。毎年の授業案内を見るたびに、教師をやめてむしろ学生として受講したいという気持ちになる。

ところが学生はどちらかという、楽しんでよい成績がとれる授業を必要最低限の単位を満たす範囲でとって、残りの時間は勉強以外のことに使いたいと考える。バイトの必要もあるだろう。まあ、ごく自然のことである。自分が何かをある程度知り、さらに深くあるいは広く物事を究明する作業をするとき、人はもっと多くを学びたくなるものなのだから。学生諸君が駒場の授業をたくさん聞きたいと思うのは、卒業してそれぞれの仕事をしてしばらくしてからのことである。

そこでどうしたらよい。まずは二つ以上の外国語を学ぶことである。最近では英語が世界の共通語になっている観があるがあり、このご時世では英語を覚えることは必要だ。しかし英語もまた世界の言語のひとつにすぎないことを、とくにわが国とアメリカ合衆国ではもっとよく認識してもらわねばならない。つまり英語の相対化が必要である。英語だけで事足れりとしてはならない。

つぎに、文系にしても理系にしても方法論の基礎や実験実習の授業をおろそかにしないことが肝要である。ときにそれは事実の列挙など退屈に思えるかもしれない。陳腐な言い方になるが、それでも古典とこれまでの知識の蓄積は何事のためにも基礎である。目新しく見える理論や解釈が実はどうの昔にちがった言い方ですでに出されていることがよくある。

とはいうものの、人間の知識量は恐るべき大きさになってしまった。毎年世界中で出版される学術書や論文の数はどのくらいあるか知らないが、一人の人間の頭の容量からすれば天文学的数字になるだろう。いきおい、専門分化した狭い世界にこもって深く知識を追求することで手一杯になる。知的活動のアナーキーという状況である。誰も全体を眺めて大きな見通しを科学的に出せる人はいない。その隙に乗じて、いとも簡単にあらゆる事柄に説明を与えてしまう、実証性を欠いたまことしやかな論理が、体系的装いをもって現れる。これにごまかされてはならない。自分で調べ、多くの意見に耳を傾け、自分を無としつつもその自分で考え、複雑でわかりにくい、結論を出しにくいということに辛抱できる精神を養うべきである。

もうひとつ、世界を視野に入れ、日本の中に安住しないこと。世界の出来事に関心を持ち、人類にとっての正義と幸福を自分のものと考え、日本は世界との関係の中で存在していることを忘れないことである。近頃の公務員の醜聞はまったくもって嘆かわしい。日本の中だけで物事を考え、社会的正義の感覚を失ったからこんなことになる。多くが東京大学法学部の出身らしい。となれば、東大生は社会的正義を大切なものともっともっと自覚すべきである。

(大貫良夫 超域、人類学)

6. 妄想キャッチセールスにご注意！

1995年5月に『トンデモ本の世界』（山本弘他著、洋泉社）という愉快な本が出て、UFO、ユダヤの陰謀、竹内文書といった主題を扱った書物が今なお続々と出版され、しかも多数の読者に迎えられて版を重ねていることに注意を喚起した。ところが同じ年に例のオウム事件が起こって、この本のメッセージは愉快なだけではすまなくなってしまった。これらの擬似学問的主張のいずれについても、それが事実無根であることはとうの昔に実証済みである。だが、実証しても無駄なのである。われわれ自身の心の中には、そういうことを信じたくてたまらない生き物が住んでいるのだ。だが逆から言えば、その生き物の生態を知ること、この種の主張の怪しさを、いちいち専門家の実証を仰がなくても自分の嗅覚でかぎわけることができる。学問論を兼ねて、一席弁じよう。

これらの書物の特徴は、「あなたは騙されている」で始まることである。エリア51で謎の研究を進めるアメリカ政府や、シオンの賢者たちや、専門の歴史学者があなたを欺瞞している。そういうことを聞くと、われわれの心の中のあの生き物が目を覚まし、正常な判断を妨げる。ひらたく言えば、ぼくらはドキドキしちゃうのである。誰かをひっかけてやろうと思ったら、開口一番「あなたは騙されている」とはったりをかますに限るのだ。

これを投射（転嫁）の機制で説明するのはたやすい。この世で自分がうだつが上がらないのは、自分のせいではなくて、誰かの陰謀のせいだ、というわけだ。だが、どうもあのドキドキは、ただの不遇感、挫折感よりも根が深いのではないかと思う。

われわれをドキドキさせるあの生き物は、このように囁く。陰謀は、われわれの平穏な暮らしを脅かすだけでなく、われわれの知覚や思考そのものを冒している。それゆえ、ものごとを根気よく調べたり考えたりするのはむだである。大事なものは、われわれをからめとっている欺瞞の網を破ること、歪曲され汚染された知覚や思考を一擲して、どこからか啓示される「真実」に一足飛びに帰一することだ、と。あの生き物は、知覚や思考それ自体が嫌いなのである。ジャーナリストならば「裏をとる（二つの別々の情報源から同趣旨の情報を得る）」。学者ならば実験を繰り返し、史料批判をする。そういう手続きに内在するなにごとかを受けつけられないのである。

性急さか。怠惰か。いや、もっと深いものだ。われわれの知覚や思考は排中律に基づいている。あなたはA君と深い仲になったら非A君とはつき合えない。排中律は、区別と有限性と相対性の原理である。つまり、A君は非A君に備わっている美点のうちの幾つかを備えていないのが普通であり、それらの美点は、逆に非A君に欠けていてA君は備えている美点と比べてどちらが価値が高いか先験的には決まっていない。昨今の論理学では排中律は評判が悪いが、しかしそれは現実にはぼくらの学問の試金石として機能している。早い話が、明快な結論を出さずにお茶を濁した学位論文は決して審査会を通らない。

「あなたは騙されている」と囁かれるとわれわれが不覚にもドキドキしてしまうのは、その囁きがそれとなく、排中律そのものが欺瞞なのかも知れないとほのめかしてくれるからだ。この世の原理は本当は万物斉同と無限性と絶対性なのであって、何らかの悪意ある欺瞞者がそれを隠蔽しているのだ。区別と有限性と相対性を積み重ねてゆく知覚と思考は、その欺瞞をいよいよこみいったものにする効果しかない。乾坤一擲の脱我、忘我、滅我だけがその欺瞞を破り、あなたをこの世の根元にある「一者」に還帰させるだろう。

この思想は生煮えの新プラトン主義である。まっとうな新プラトン主義ならば、個別存在とその有限性や相対性は「一者」の充溢それ自体から生まれてくるのであって、欺瞞者が入り込む余地はない。そうして、無限者がその内的充溢から有限者となってあふれだしながら些かも自分を損じないというこのヴィジョンは、何しろ古代思想の最高峰なんだから、これをちゃんと直観把握しようとしたら相当に想像力を鍛錬する必要がある。ところが、欺瞞者を出してくると事態はえらく安直になってしまうのだ。欺瞞者は当然「真相」を知っているだろうから、それを暴露したらいいわけである。「あなたは騙されている」のひとは、新プラトン主義の

ヴィジョンに備わったドキドキを、あたかも写真週刊誌のような安直さで、不遇感に悩む性急で怠惰な精神にもたらししてくれるのである。

デカルトという人の形而上学は、要するに「われわれは騙されていない」という命題に尽きる。この、ちっともドキドキしない結論に達すると、あの人はもうそれ以上形而上学をもてあそぶ危険を冒さずに、解析幾何学や屈折光学や血液循環に進んでいった。範とするに足る態度だと思う。

(高橋 均 地域、スペイン語)

7. 駒場キャンパスの学生の多様性

駒場の教師は、何といっても、相手にする学生の種類が多い。本郷の先生たちだったら、学部の特設課程にいる3・4年生と大学院の学生に接触するだけだが、駒場の場合は東大の新入生の全員を引き受けている手前、1・2年生の相手は重要な仕事で、それに特設課程の3・4年生と、大学院の学生とが加わる。私の場合は日本史が専門なので、大学院には外国人の留学生も沢山いるから、全部で4種類の学生と日常的に付き合っているわけだ。

駒場に來たての頃は、まだ留学生の数は少なく、特設課程の授業も持たなかったから、まだ楽だったが、それでも、つい数日前は高校生だった諸君と、大学院で職業研究者を目指している成人学生の間で頭を切り替えるのは、難しかった。その後、いくらなれたと言っても、4種類の学生諸君を前に、それぞれ授業の中身と方法を考え、態度を変えるのは難しい。根が不器用なので、結局、いつも同じやり方になっている。

とはいえ、4種類の学生は、それぞれに面白い。面白いが、まず面白くない方の話からしよう。それは1・2年生相手の講義だ。反応があまりないし、学期の最初と最後だけ出席して、それも試験やレポートの課題を聞いたらすぐ教室を出て行く手合いが少なくない。私は要するに働く意味を頭から否定されているのだ。どんなに一生懸命授業の準備をしても、内容はどうでもよく、点数の配給を求められているだけなのだ。また、講義の途中で教室を出たり入ったりする学生も気にかかる。教師だって人間だから、自分が精神を集中して話を組み立てている目の前で、教室を出て行かれたらがっかりする。おまえの話はつまらんと、これ見よがしにやられるとなおさらだ。昔、自分もそうした「生」をやった経験があるから、これはしかたがないが、しかし、その同じ学生がまた教室に入ってくるとなると、これはもう理解を絶する。私は人間扱いされてないのだろうか。ひょっとしてブラウン管の向こう側にいて、目の前で寝転がっても気づかないと思われているのではないだろうか。同じことを恋人に対してやったら、あるいは仕事の相手に向かってやったら、どんなことが起きるか、考えてみてほしいものだ。

とはいえ、楽しいこともある。小数ながら、熱心に耳を傾けていて、ここぞと思うときにちゃんと表情が変わる学生がいる。つまらなそうな顔をして聞いていたくせに、答案やレポートを見ると、驚くほど正確に要点をつかみ取り、自分なりの展開をする学生がいる。講義の後に鋭い疑問を投げ掛けてくる学生もいる。そんなとき、ああ教師をしていて良かった、駒場で教えられるとは幸運だと心から思うのだ。

私はもうベテランに属するようになったのかも知れないが、それでも新しいシリーズを始めるときはしんどい。一日講義が終ると、すぐ翌週の準備が始まり、前の晩は半深夜になることもある。それが半年は続くのだ。体調は最悪だから、学生諸君は必ずしも良いコンディションの話を聞けるとは限らない。言語不明瞭になることもあるだろうし、内容の整理が行き届かないため難解になることもあるかも知れない。それでも熱心に聞いてくれる諸君がいる。ありがたいことだ。でも、理想を言えば、同じテーマで同時に演習をやってみたい。そこで、共通の材料を手にして議論をすれば、どんなにか理解が深まることだろう。教師の話を一方的に聞くだけでなく、学生も対等な資格で知識を生み出す体験を共有できるのだ。

こんな思いが一部実現したのが、基礎演習と全学ゼミだ。1996年に私が担当した基礎演習では、学生諸君に新聞を素材に数個のテーマを設定するよう求め、自分で調査してその成果を発表してもらった。あるグループは、高齢者の介護という問題を取り上げた。女性が発案者だったが、今の若い諸君全員にとって重要な問題だと指摘すると、男声にも参加者が現れ、なんといきなり老人ホームに飛び込んで調査を始めた。また、別のグループは新聞社に出かけて、その記事製作の実際を調べるのに成功したが、それに味を占めてテレビ局に向かった時には門前払いを食らった。いずれの場合も日本社会が実際にどうなっているのか、知る糸口を得たわけだ。彼等は苦労した分以上に楽しんだのではないだろうか。そして、同時に、自らの体験を適切な書物と照合して考え直し、さらに次のプランを立てるというダイナミックな知の獲得の仕方を、自ら会得したのではないだろうか。私は、はたから見ていて、毎週毎週の展開が実に面白かった。勿論、他のテーマを取り上げた諸君も、それぞれ違うやり方で、自ら学ぶという学問の本面目を体験したのではないかと思う。

1996年度後半には、全学自由ゼミも開いた。おもに他学部の先生方が1・2年生を対象に開いている演習だが、駒場の教師もやる権利がある。「アジア太平洋と日本」というテーマを掲げて、最新の研究書を3冊読んだ。参加者は最初は6名。最後には4名となったが、残った諸君は実によくやった。私が駒場の学生だった頃は、新書版で1週に1冊、堅い本で1月に1冊、英語のペーパーバックで1学期に1冊というペースのゼミに出たことがあるが、今の私はさすがにそんな無茶は出来ない。それでもなかなか骨のある本を取り上げた。学生諸君はよくついてきてくれたが、中でも驚いたのは、上海から来た中国人1年生Y君だ。彼は毎回、正確な要約を作って来、日本人顔負けの議論をしたあげく、メンバーの一人を誘って、外務省の公募した懸賞論文を書くという離れ業をやったのけた。日本人の学生諸君。彼に出来て、日本に生まれ育った君らに出来ないはずはないんじゃないか？この演習に参加した諸君は、Y君を含めて、良い出会いを楽しんでくれたのではないかと思う。私の学生時代もそうだったが、ぶらぶら生活の合間にとときどき教室を覗く生活はつまらない。駒場が世界の他の場所とまったく違うのは、こうした希な出会いをさりげなく、あちらこちらに用意し続けていることだ。「求めよ。さらば与えられん」、それは駒場のために取っておかれた言葉のようだ。

紙数がオーバーしたので、専門課程や大学院の話が書けなくなった。ただ、一言だけ述べておこう。それは、駒場には外国からの留学生がとて多いので、ぜひとも彼等と付き合う経験を持ってほしいということだ。彼等は日本語を話す。遠慮はいらない。遠慮のないつき合いをすれば、彼等も同じ人間なのだということがよく分かるし、もっと理解するにはやはり外国語を学ばねばということにもなるだろう。大学生活を経験した人は、今からは、外国人も日本人もこきまぜて平気で付き合うのが当たり前になる。その経験を積むためにも、駒場は宝の山なのだ。

(三谷博 地域、歴史学)

3 大学生の読書と図書館とは

読書と図書館

『葉隠』に「御情なく御無理千万なる時する奉公が奉公にて候」という言葉があるが、それをもじって言うなら、「必要なくひよいと思いついてする読書が本当の読書」である。古本屋の店頭で見かけた本、遊びに行った友人の下宿の書棚で見かけた本、こういう書物の中から一生離れられない趣味や道楽ばかりか、生涯を貫く専門やテーマ、いな思想的支えさえ見出されることがある。

駒場の学生だった頃、私は三軒茶屋の古書店で、『松沢病院看護日記』という本を五十円くらいでたまたま入手した。その中に昭和初期日本共産党「軍事部長」H氏が逮捕後、入院していた記事があり、調べてみると京大経済学部中退、「スパイ M」に乗ぜられて一九九三年一月逮捕、その後精神に変調を来たして入院していたのである。

本部の学生の頃、近くの白山の古書店で『唯物論者の見た梟』という本を見かけた。内容は、フクロウを賛美し、古今の文献のミミズクやフクロウに関する部分に言及しながら、この動物への愛を謳った誠にかわいい本だが、その著者は日本共産党史の発掘を飾る「福本イズム」の主、福本和夫であった。なるほど、こんなふうのにのめりこんだら抑制が利かないたちなのか、と思ったりした。

私が戦前の日本共産党史について、その後も専門外ながらテーマにしてきたのも、この二冊の本と出会ったことによるところが大きい。

私はまた、新刊書ばかり読んでいる人を軽蔑している。そんな人は、現代人の視野からしか物が見えず、「時代を超える」ことができない。戦争中には軍国主義の旗を振り、戦後はマッカーサーを崇拜し、スターリン主義、毛沢東主義、実存主義から、現在の「ポストモダン」まで、いつでも時流に流されて来たのはそんな人である。大学入学直後に習ったドイツ語文法の教科書に、Immer etwas Neues und nichts Gescheltes.という例文が出ていたが、これは「新しいものの好きはものにならぬ」というような意味であろう。

そうだとすれば、古本屋もいいけれども、古今の無数の書物の中から、すばらしい本との出会いの機会を得る場として、図書館ほどいい場所はない。確かに東大図書館は関東震災で焼けて、それ以後に集められたものだから、それ以前の書物については、やや物足りない面もあるが、さすがに大勢の先輩たちが精魂を込めて蒐集したコレクションだけに、重要な学術文献は驚くほど揃っている。この書棚の前を歩く贅沢は、東大を離れて見ると痛感する。

教養学部図書館は、分野が広汎であるためやや総花的な嫌いがあるとはいえ、34万冊の蔵書を有し、諸学問への入門の便宜を図っている。地下鉄を利用すれば、学術書・非学術書何でもある国会図書館、そして100万冊の蔵書を誇る本郷の総合図書館もあり、総数800万に及ぶ学内の各学部や研究室の図書も、規則に従って利用することができる。卒業生たちにも、これらの書物の利用は開かれている。

しかしこれだけの貴重な文献群を前にしても、読めなければ、「猫に小判」である。若いうちにできるだけ語学を学ぼう。英仏独伊中露朝、ラテン、ギリシャ、ヘブライ、アラブ、ペルシャ、トルコ、スワヒリ、ヒンディ、チベット、タイ、ヴェトナム、ジャワ、それに古代アッカド語、古代エジプト語、サンスクリット語、パリー語、古代中国語（漢文）や日本の古文書などがみんなスラスラ読めたらどんなにすばらしいだろう。

——こんなことは人間わざでは不可能だが、三つか四つかくらいは、読める言葉を作っておくことも、駒場時代でないとなかなかできないことである。

（図書館長 長尾龍一 国際社会、法・政治）

4 試験対策・進学先を決めるには

進学情報センター

本学の特徴である進学振り分け制度は前期課程教育を重視した結果の制度である。すなわち、学生諸君は前期課程において、幅広い勉学をすることによって自分の特性を見極め、自分の能力を発揮できる学科を選択し、専門課程である後期課程へと繋いでいく。そこには広大な学問の世界が横たわっている。

幅広い勉学は、単に広い豊かな教養を身につけるということだけでなく、自分の特性や自分の置かれている様々な状況をも客体視する事を可能とする。これにより進むべき専門分野も見えてくる。そして新しい知見は新しい価値観をもたらしてくれる。各自の適性に合った進学先を選びだすためには専門分野に対する基礎知識が必要で、それなくしてその専門分野の価値評価はできない。

大学受験までに学んできた事柄は確かに学習の基礎となるが、学部後期課程の専門に関する基礎となる知識としては、乏しく不十分であることを自覚しておかなければならない。それらの多くは今までの教科の中にはない全く新しい事柄なのである。この前期課程の学習は、それによっていままでの自分が描いてきた将来像を改めて考え直す機会であるとも言える。

それではそのための勉学はどうあるべきであろうか。受け身の消極的な態度で前期課程での教程を終えるということでは、とても十分とはいえない。前期課程のカリキュラムはかなり自由度をもたせ、幅広く学習する事ができるようになっている。文科系の各分野については講義の他、本などからある程度の基礎知識は独力で知ることができる。そこでは積極的な勉学が必須である。一方、積み上げが必要な理科系の各分野に関しては、表面的なことや一般受けの事が書かれている本や新聞などからだけでは知ることのできない分野が非常に多い。土台の基礎教科をしっかりさせておくことは何よりも先決である。その上で専門分野を概観したときに、本学は学部・学科名から学問のほぼ全域をカバーしていることに気づくであろう。学科名はほぼその専門分野名で表現されている。しかし、そこではどのような事柄をどのように学習し、どのように研究しているか、どのようなことが問題になっているか、といったことはなかなか見えてこない。ここに進学振り分けの難しい問題がある。表面的に名前だけから判断して後期課程を選択する事は避けなければならないであろう。

大勢の希望者が殺到するいわゆる「人気学科」をそれにつられて実情を知らずに選択してしまい、また、学科名からそこでの内容を自己流に勝手に解釈し選択してしまった結果、「こんな筈ではなかった」と後悔するケースは毎年のように少なからず繰り返されている。

とはいえ、1年半という短期間に進学先を決定しなければならない。「人気学科」へはそれなりの高成績が必要であるが、そのような学科のいくつかは前期課程での基礎科目の学習をより必要としている点で、その選抜自体が後期課程で意味を持っているとも言え、その場合には消極的ながらそのような選択は結果的に当を得ていることになるかもしれない。

しかし、諸君の選択と専門分野での受け入れ側との整合は必ずしも十分とは言えない。その理由はすでに述べた専門分野にたいする理解が不十分だからである。

では前期課程を有意義に、そして進学振り分けを有効に生かすにはどのようにしたら良いだろうか。それには自発的な学習が必要であることは勿論であるが、さらに、本学部では将来各自がその能力を発揮できる分野を見いだすために対応できる教育上の配慮をいろいろ用意している。

まずカリキュラム上で見てみると、「総合科目」は大変幅が広い。しかし、後期課程の幅と専

専門分野までを見通すには十分ではない。これに対しては「全学自由研究ゼミナール」があり、ここでは専門分野での特徴を知ることができるであろう。

入学時に配られる冊子「進学のためのガイダンス」は学部紹介が詳しく示されている。また、5月から6月にかけて各学部・学科の「学部ガイダンス」が行われ、そこで後期課程の紹介が行われる。これは教官側が行うものであるが、後期課程の学生が「自主ガイダンス」という形で学科紹介を学生側からの視点で随時開催している。なお、各学部・学科（農学部では専修）には進学指導担当教官がおられ、進学に関する諸問題について相談等の窓口の役割をされている。その一覧表は学内広報に掲載され、また進学情報センターに常時掲示されている。もちろん学生が直接連絡しても良いし、進学情報センターは積極的に連絡を取ることを支援し仲介の労をとっている。

進学情報センターは後期課程進学に各自が能力を発揮できる選択を行えるようにするために各種の情報を提供し、ガイダンスするところである。以下にその紹介をする。

進学情報センターでは、毎年春に特定テーマを設けて全学部から講師を招いてシンポジウムを行っている。そこでは研究の方法や視点など、いろいろな角度からの研究が易しく語られ、学問の生きた姿を目の当たりに展開してくださる。「全学自由研究ゼミナール」とはまた違った大変貴重な学習の場を提供してくれる。平成9年度は「かたちの科学」と「ブレインサイエンスが面白い」というテーマで行う。

また、当センターは「学部・学科見学会」を積極的に各学科に働きかけた結果、多くの学科が行うようになっていく。「学部ガイダンス」の後、7月までの間に希望者を募って学部・学科を実地に見学し理解を深めてもらう。募集は進学情報センター資料室などで掲示で呼びかけるので注意して欲しい。なお、近年、各学科が見学会の重要性を認識し、ガイダンスの時点で独自に見学会開催を予告し、当センターを経由しないケースもあり、また、テーマ講義等でも、学部・学科が独自に見学会を開催するなど多くの学科で実施しているものと思われる。これはたいへん効果的と思うのでぜひ参加することを勧める。学生諸君の側でも見学希望を積極的に提案して欲しい。なお、文学部などでは「オープンハウス」として、授業を期限を限って公開してくれる。これも掲示する。

進学情報センターは資料室と進学相談室とから成り、時計台の建物、一号館正面二階にある。資料室には各種の資料、掲示に加えてパソコンが8台設置され、そこには様々な進学情報を自由に検索できるようになっている。そこには過去の進学に際しての進学志望集計の成績分布や後期課程の専門科目、他学部との関係など、進学に際して参考となるデータが格納されている。本学ではすでに述べたように学部・大学院のほか、いくつもの研究所、研究施設等において大勢の教官によって学問研究が大変広い領域に亘って行われている。進学情報センターでは本学全教官にアンケートを依頼し、研究と教育に関わる情報をデータベース化してコンピュータに格納しており、それは進学のための情報として多くの学生に非常に役立っている。

この他、資料室には各学部・学科や大学院・研究所などの便覧や資料を多数用意しており、いつでも閲覧できるようにしてある。また、その時々の進学志望集計のようなホットなデータは速報として資料室において掲示し、随時、重要な事柄はデータベース化してコンピュータによって検索できるようにしている。さらに、年3回、学部・学科紹介や進学に関わるニュースを「進学情報センターニュース」として発行している。資料室にあるバックナンバーには沢山の紹介記事があるのでそれらも参考になるであろう。

進学情報センターでは学生諸君の個人的な進学相談にも応じている。込み合うときは予約を優先しているので、教務課に申し込みをしてもらう。

学問の世界は本当に広い。前期課程の一年半の間に幅広い視野をもって勉学を進め、基礎的な素養を学び、自分に適した専門分野を見出し、将来の発展へとつないでほしい。これが前期課程で諸君に期待することである。このために進学情報センターを十分に活用して欲しい。

（進学情報センター 波田野彰 相関基礎）

5 授業の受け方、実験実習、基礎演習とレポートの書き方では何が大事か

1. 授業への心構え

駒場の前期課程のカリキュラムは、基礎科目、総合科目、主題科目に分かれる。ここでは新1年生の諸君を対象に、基礎科目（とくに基礎講義、方法論基礎、基礎演習）と総合科目についてその概略を説明し、教官側からみた履修上の注意や心構えについて簡単に述べることにしよう。

履修の手引きによれば、基礎科目とは、「前期課程において最低限身につけておくべき基本的な知識・技能などを習得するためのもの」である。基礎科目の多くは語学のクラスを単位とした必修科目であり、クラスの仲間ともしっかり顔を合わせ、共に学ぶのがこの科目ということになる。ただし、文科系の方法論基礎やスポーツ・身体運動のようにクラスの枠を越えて選択必修となる科目もある。

理系の基礎講義は、文字どおり、将来どの専門に進学するにせよ理系の学問の基礎となる科目群で、高校時代の数学や理科の諸科目の発展上にあるものだと考えてもらえば、だいたい結構である。けれども、「基礎」イコール「簡単」とは素直にいかないところにこの科目の落とし穴がある。自然科学は論理の積み重ねの上に成り立つ学問であるから、各回の講義をきちんと理解しておかねば、理解が先に進まない。新学期早々はサークルやクラスのイベントも多く、ついつい出席がおろそかになるが、そのツケがもっともきつく効いてくるのが基礎講義であるといってよい。いったん分からなくなると、つまらなくなり、教室へ向かう足どりが重くなる。すると、ますます分からなくなるとならないよう注意して欲しい。もちろん、きちんと聞いていても分からない事項はどんどん教官に質問する習慣を身につけよう。教官はおうおうにして学生がだまっていると分かっていると思いこむ習性があることを覚えておこう。基礎講義に限らず、教室は教官と学生の相互作用の場であるという認識は重要である。

文系の基礎科目は方法論基礎と基礎演習からなる。選択必修である方法論基礎は総合科目と通じる点もあるが、駒場の専任教官が責任をもって担当する科目であり、人文・社会科学の出发点となる科目群である。

基礎演習は20名前後の小人数クラスで行われるゼミナール形式の講義である。基礎演習では、自分で調査をし、その結果を皆の前で発表し、議論した上で、文章にまとめあげるといふ、大学での学び方の原点が訓練される。学生の一人一人がクラスメートや教師に対して、主体的に調査内容を伝えるという「発信型」の授業である。また、他の大教室の講義にはない教官とのパーソナルな関係も築かれる。基礎演習の具体的な進め方は、担当する教官によって少しずつ異なるが、学生が自由に調査テーマをみつけて、調べ上げていくというクラスが多いようである。

基礎演習では、受験勉強のように正解がある問題を解くのではなく、答えがなかなか見つからないような難問を自分で見つけてこななければならない。調査を進めるほど問題の所在が深いところに逃げていくような錯覚をおぼえるかもしれないが、さまざまな新しい世界との出会いもあるはずだ。その過程で、どのようにして資料を集めるか（図書館やデータベースの利用法）、どうしたら自分の主張を相手に説得できるか（論理の組立、発表技法）、レポートや論文のまとめかた（論文作法）が自ずと体得されていく。また、クラスメートの発表に耳を傾け、新しい知識を得ると同時に疑問をぶつけて、議論の仕方を学んでいくことになる。

総合科目は、クラスや文理の枠を越えて、一人一人が各自の関心や興味にしたがって、多様な科目の中から選択する科目群であり、「現在において共有されるべき知の基本的枠組を多様

かつ先端的な角度・観点から習得するためのもの」である。A（思想・芸術）、B（国際・地域）、C（社会・制度）、D（人間・環境）、E（物質・生命）、F（数理・情報）の6系列から構成され、開講数は夏学期だけでも400科目を越す。それぞれの科目はアップデートされた内容を含み、受講者は学問の最前線に触れる醍醐味を味わうことができるだろう。学生諸君にとっての悩みの種は、星の数ほどある多彩で魅力的な科目からどれを選択するかということであろう。進学振り分けを念頭におくと、先輩からの情報に従ってよい点数のとれそうな科目を選ぶということが生じがちだが、その情報が信頼できる保証はない。であれば、やはり各自がもつとも惹かれる科目に素直に挑戦するのがよいであろう。また、1年の夏学期から総合科目を山のように登録している人が多く、そのせいで夏学期に「立ち見講義」が続出するが、受講者が少なくじっくりと講義が聴けるのはむしろ冬学期である。夏学期の科目紹介には、冬学期の開講予定も掲載されているので、計画的な履修を心がけてほしい。参考図書をじっくり読んだり、講義で提示された討論点を時間をかけて考えるためにも、余裕をもった選択が望ましい。

（長谷川壽一 生命・心理・教育学）

2. 基礎実験(化学)に臨む新入生諸君へ

2学期、3学期の理科生に対して行われる基礎実験の中で、特にこれから化学実験に臨む学生諸君に対しての要望を述べてみたい。

化学実験の内容は、高校卒業までに化学の授業中で行ってきた実験内容とはかなり異なった高度なものであり、その実験種目、用いる実験器具・機器類、実験手法などの面において、レベルの違いに戸惑う学生諸君も多いことであろう。

基礎実験は、基礎講義と基礎実験が相補的に働くことによって、自然科学の理解が深まるように考えられている。しかし実際には、実験を行う順番の制約から、必ずしも講義を受けてからその内容を実験を通して確かめる順序で行うことができず、逆の順序となる場合もあるであろう。基礎実験テキストには、これから行おうとする実験テーマの原理や予備的知識が、最低限得られるように解説が加えられている。したがって、実験に臨む前には是非実験テーマ部分のテキストをよく読んで、内容を理解するように心掛けて欲しい。また、実験を行う際に疑問を抱いた時には、自分で勝手に判断するのではなく、側にいる担当教官に必ず相談して欲しい。現在、実験指導は担当教官の他に、ティーチングアシスタント(TA)と呼ばれる化学を専攻する大学院生も、君たちの実験の面倒を見るシステムになっている。教官に直接尋ねにくいと感じる人は、君たちの数年先輩のTAの院生にどしどし質問して、わからない点をはっきりさせてから実験を実行して欲しい。TAの院生は比較的にはかみやささんが多いから、君たちの方から積極的に話しかけてくれれば、それがきっかけとなり、必ず懇切丁寧に教えてくれるはずである。

化学実験では、実験レポートの書き方に慣れていない君たちが提出した最初のレポートを、書き方に関して実験担当教官が添削することになっている（ただしこれは決して実験テキスト中の設問の正解を教えるものではない）。返却されたレポートで添削された箇所をよく見直して、自分のレポートの書き方のどこが悪かったのかを理解して、次回からのレポート作成に大いに活かしてくれることを希望している。

化学実験には、ちょっとした不注意から、ガラス器具の破損で指を切ったり、薬品を目に入れて目の機能が損なわれるといった危険性が常にある。このような実験事故を起こすことなく、化学実験実習を通して物質の変化の多彩さを体験することによって、一人でも多くの学生諸君が化学の魅力を感じとってくれば良いと常に思っている。

（尾中 篤 相関基礎、化学）

3. スポーツ・身体運動、身体運動実習、身体運動科学

運動やスポーツに関連した実技の授業として、駒場では1・2学期には必修のスポーツ・身体運動、3・4学期には選択の身体運動実習がある。どちらも第1週（1学期は第3週）に選択した種目を、1学期間継続して行う。実施されている種目には、テニス、サッカー、ソフトボール、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、バドミントン、卓球、トレーニング、合気道、ゴルフ（3、4学期のみ）、陸上競技（3学期のみ）がある。ただし実際に履修できる種目は曜限により異なる。またスポーツ医学の専門家である教官により、特別身体運動コースも設けられており、各自に合った運動の処方を受けることができる。実施種目の中で最も特色あるのはトレーニングである。各教官により詳細は異なるが、基本的にはバーベルやマシンを用いたウェイトトレーニングを中心とする体作りを、基礎から応用まで学ぶことができる。トレーニング以外の種目では、基礎的な技術はある程度学んだ後に、どちらかというゲーム中心に運動を楽しみながら行うことに主眼がおかれている。教官からの指示を待つのではなく、グループやチーム単位でどんどん運動していき、教官がアドバイスするという形式になる。実技の授業では駒場生活での体力水準の維持や向上というだけでなく、将来的に運動を楽しめる知識や習慣、環境を与えることも目指している。また実技の授業は教官と学生との会話や交流が最も頻繁な授業の一つであろうし、教官側も学生諸君との会話の機会を大事にしているので、遠慮せずにどんどん話しかけて欲しいものである。

スポーツ・身体運動と身体運動実習は内容的には概ね同様である。スポーツ・身体運動はクラス指定された曜限に履修するのに対し、身体運動実習では曜限も選択できるので、種目の選択幅も大きくなる。さらに身体運動実習では、以下のバラエティに富む内容の授業も開講される。まず集中形式で行われる授業であるトレーニング科学実習とスキーがある。前者はトレーニングの科学的背景を講義と実習で学ぶものであり、後者は駒場での何回かの授業後、スキー場で行う。次にゴルフも、駒場での通常授業の最後に検見川運動場で実際にラウンドする。また3学期には陸上競技が、4学期には脂肪を減らすことを目的とするファットバーニングが開講される。このような3・4学期の特色ある種目の選択には、教官の説明や掲示に注意して欲しい。各学期全てにいえることだが、第1週の授業に出られないと、希望の種目が選択できないことが多いので、第1週の出席が望ましい。

駒場には球技や武道を中心とする体育館が二つ、ウェイトトレーニング中心のトレーニング体育館、全天候舗装された第一グラウンド、ラグビー場、野球場、9面のテニスコート、ホッケー場である第二グラウンド、バレーコート等の施設がある。ほとんどの運動部や同好会の活動も駒場で行われており、これだけの施設でも十分でないほど利用されているが、これら施設の管理や維持も、実技授業の実施によって支えられていることをつけ加えたい。

実技の授業と関連して、総合科目の講義として身体運動科学が5コマと健康スポーツ医学が1コマが開講されている。何名かの教官の分担での講義であるが、内容は各担当教官の専門分野を中心に進めることが多く、また専門の近い教官が組んでいることが多い。講義の中心となる内容を概ね分類すれば運動生理学、運動生理生化学、運動神経生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学となっている。選択にあたっては科目紹介を良く読んでほしい。また夏学期と冬学期とで、教官の組み合わせはほぼ同様である。実技の授業中には運動の理論的背景を説明する時間は十分ではないので、身体運動科学を選択することを勧める。また前述したトレーニング科学実習でも、トレーニングの科学的背景を学ぶことができる。

運動は一生の友であり、前期課程修了後にも、希望者に運動の場を与えたいということで、3、4年生を対象に、本郷の御殿下記念館で実技の授業、スポーツ・トレーニングも行われている。多くの学部ではこの授業の単位が卒業単位にも認定されている。駒場生活では関係がないが、この授業の案内は学内広報にも掲載されるので参照の上、本郷の生活でも運動を取り入れて欲しいものである。

（八田秀雄 生命、スポーツ・身体運動）



6 外国語の修得は習より慣れろか

1. 〈英語 I〉の活用法

「大学が変わる！」と、社会的な注目の中で始まった〈英語 I〉も4年目を終え、教材改訂が進んでいる。今年の二年生は全体の半分が新教材での授業になる。

がっしりとした内容のあるものを、とにかく少しでもすらすらと読めるようになること。ある程度知的な話も、ゆっくりならば、内容がそのまま頭に入っていくようになること。英語 I のメニューが目ざすのは、まずその点である。各課は、リーダーとビデオ教材からなっていて、ウェートは半々。試験の配点も50点ずつだ。

1. リーダーの予習

リーダーには、かなり詳しい注がついているから、その課のポイントは辞書なしでも読みとれるはず。授業中にやるComprehension Checkは、基本的に、その課の要点を再生できるかどうかを問うものだから、予習の際に、要点を英語でメモっておけばバッチリだろう。でてくる単語を全部覚えろという要求は、英 I ではしていない。ただ、巻末のIndexに載せた単語は、大学前期課程で必要だと思う基本語に、各課のトピックのキーワードになる語を加えた構成になっているので、そこに出てくる語は要チェックである。

2. ビデオ教材

聴解力アップのためのビデオ教材は、東大の学生の実力と関心に合うよう教師たちが作成した、駒場特製のもの。これを見るには教室にこなくてはならない。スクリプトは配布しない。言葉というものはいつも文字によって得られるとは限らない、発声された瞬間にキャッチする以外方法がない、という姿勢で臨んでほしいからだ。ただしほとんどの教師は授業中、テレビ画面にスクリプトを映し出すサービスはやっている。

3. 授業は

もちろん出席して、2種類の演習を受けることが基本。毎回集めた演習用紙に、教師が目を通すというサービスは、今年もきっちり続けていく。大学ってところは学生が受身になっては機能しない。大人数クラスだって遠慮することはない。わからないところは、時間の許す範囲で質問すればいいし、先生への要求もどんどんぶつけてみるべきだ。

4. 質問室とEnglish Discussion Room

英語 I では、英語の特に堪能なTAをお願いして質問室を設けている。リーダーの解らないところは解らないままにしておかないで、その週のうちに解決しておこう。ここに来れば、ビデオを繰り返し見することもできる。別の部屋にいけばバイリンガルのTAと、英語で自由に話すこともできる。場所は共に10号館3F。開設時間は掲示で確認のこと。

5. リーダーの復習と試験対策

試験に些末な問題は出ない。その課全体のポイントがきちんと英語で理解できていることを具体的な設問によって問う。「訳本」と称するものもキャンパスに出回っているようだが、それを使って勉強してはかえって損になるような問題をこちらでも工夫する。

6. テープの配布（詳細はクラスで）

リスニング教材のビデオは、教室と質問室でしか見られないが、その音声を吹き込んだカセットテープは、授業終了後、数週間分まとめて配布している。授業中のListening Practiceがでただけでは、試験対策としても不十分。できなかった学生はなおのこと、ただで（つまり生テープと交換で）もらえるこの教材を活用しよう。Introduction Videoも、もちろん試験範囲に含まれる。テープは期限を限って配布しているので、授業中の連絡に注意すること。このサー

ビスは日々の勉強のためである。したがって試験直前になって何週間も前のリスニング教材をもらいに来ても応対できないので注意すること。

この自習用テープの一番いい家庭学習法は、頭からそれを書きおこしていくことだ。それ専用のノートをつくる。この作業は英作文の練習にもなるだろう。英作文というのは、与えられた日本語を英語に置き換えることではなく、言うべき内容を自分の英語で表現することだから、しっかり内容のあることをやさしい英文で表現した英 I のリスニング教材は、格好の練習台になるはずだ。書き取れたら、それを見ずに、あとについて言ってみる。あとについて言えるようになったら、今度は一緒に言ってみる。

7. 試験と成績

試験は期末一本。範囲は相当広いので、普段の勉強が勝敗の分かれ目になる。ただし期末の点数に加え、各教師が、それぞれの学生の授業への参加度等をもとに、試験の点数に対し加点・減点を行なうしくみになっている。遅れてきたり「ただ出るだけ」ではかえってマイナスになりかねないが、授業で頑張った学生が損をしないよう、教師たちはちゃんと目を配っています。

8. 「English-Only Classes」と「リスニング重視クラス」

やる気のある君には、ネイティブの先生が講義のすべてを英語でやる「English-Only Classes」への参加をお勧めする。「リスニングをもっとやりたい」という人たちは「リスニング重視クラス」を選択すると効果が上がるだろう。これらのクラスは一度申し込んで受け入れられたら半年間からなずそこで受講してください。

9. フィードバック

English-only classも学生側の要望で実現した。授業に関して提言があったら、どしどし教師に言ってみよう。英語 I 準備室（10号館3階L312）に来て、制作班の教師と話をしてくれてもいい。英語学習についての個人的な相談にものってもらえるはずだ。

とにかく

英語は精緻な実技科目である。「英語でつっぱしる力」を鍛えないとダメ（本当に、これから第一線で仕事をしていくなら、そうならないと仕方がないのだ）。たしかに君たちの「走力」に、入学時においてすでに差ができているのは事実だろう。リスニングに関してはその差がとても大きく感じられるかもしれない。試験にはどうしても実力が反映される。優秀なシケタイの作ったシケブリを手に入れば、直前の「対策」でもなんとかなる科目もあるのかもしれないが、英語 I は違う。で、「英 I はこわい」という話になる。「所詮できるヤツができるんだから」というような投げ遣りじみた発言も耳にする。でも、そんなふうに考えたら結局損だろう。1年後、2年後に結果が出ていることが大切だ。

がんばってほしい。

（佐藤良明 超域、英語）

2. 選択英語

駒場の1、2年の選択英語は、英語 II と国際コミュニケーションからなり、R1(速読)、R2(精読)、LS(聞き取りと会話)、W(作文)の区分があります。英語 II は必修選択なので、そちらを中心に話を進めましょう。まず大学入学の時に手渡される履修案内をよむこと。選択は自分の割り当てられた曜日・時限の中から行います。さまざまな授業があるので、自分の興味に合ったものを選んで下さい。ただ、全員の希望を通すことは、設備や時間割全体とのかねあいで残念ながら現状ではできていません。ミスマッチをなくす努力はこれからも続けていくつもりです。学生の皆さんからの意見は数多く耳にしますが、ここではわれわれスタッフが普段思っ

ていることの一部を紹介しましょう。

○選択にあたっては、皆さんの興味や必要をもとに考えて下さい。どだい「楽勝」の授業なんて存在しません。期末にどんな評価を出すかなど教える本人だって予測不可能なのですから、不確かな情報を基に授業を選択するのはもったいない限りです。それと、「役に立つ英語」という魔物にたぶらかされぬこと。実社会では会話だけでなく、何十頁もの資料を短期間で読み、プレゼンテーションする能力も要求されます。詩や小説を読むことも、当然「知識人の英語」には必要なのです。授業をどう役に立てるかは自分しだいということです。

○聞き取りの苦手な人は、テープ等を一度や二度でなく、五十回くらい繰り返して聞いてみましょう。目で憶えた文字（たぶん頭の中にはあやしいローマ字読みが響いていることでしょう）と、聞こえてくる音とのギャップを自分の口で発音して埋めていくこと——洋楽の好きな人が発音がよかったりするのとは、この運動をいつもしているからだと思います。これはスポーツでフォームを直すのと同じです。反復練習で鍛えて下さい。

○辞書は読むものです。知ってる（はずの）単語でも、ちょっとでも疑問があればひいて見ること。英語辞書は充実したものが出ているのに、小型辞書や電子辞書で済ませている人が多いのは残念です。ひく時は、単語の最初の見出しだけでやめてしまわずに、文法的情報も含めて、もっとも合点のいく項目が見つかるまで読むことが大事です。

○ことばの受信と発信は一体の関係にあります。文章を読むとき、和訳のことだけ考えていませんか？読解の目標の一つは、自分で使い回しのできる表現をピックアップすることです。発音と同様、文章表現もテキストのマネをすることから上達していくのです。読解の予習するときも、単語を引くだけでなく、そうした表現をメモしたり、日本語のテキストを予習するのと同じように要点をノートに書き出したりすることをおすすめします。また多くの授業は、R1／2、LS、W どれであっても、テキストを補足しつつ日常表現や社会的背景について解説しながら進められるので、そういう情報はノートしておく習慣をつけましょう。こうした知識の肉付けがあってコミュニケーション能力が養われるのです。

○最後に、「大学に入って英語力が落ちた」と言うのはもうやめにしましょう。単に勉強時間が減っただけです。高校で運動部だったのが大学でお遊びサークルに入って体力が落ちたのを、教官のせいにするか？

とまあ、並べるときがありません。つまりところ学生の皆さんとしては、選択英語も他と同じく「独立自尊」の気組みで臨むのが一番だということです。基本的な語彙や文法を身につけた皆さんに対して、われわれスタッフは学習の素材を提供しガイドをするという役割を担っているわけです。ですからその日の授業とは離れたことでも、積極的に質問して下さい。

（大堀壽夫 言語、英語）

7 情報処理および基礎講義には学び方がある

1. 情報処理

現代社会では、さまざまなところにコンピュータやコンピュータ的思考方法が使われています。これは直接コンピュータを操作する場合に限りません。そのような社会で積極的に生きていくためには、コンピュータに対する基本的な理解がどうしても必要です。そこで、教養学部ではコンピュータの基本を学ぶ「情報処理」を必修科目としています。

コンピュータに対する基本的な理解のためには、コンピュータをある程度集中して操作した経験を持つことが絶対に必要です。それも、「操作をさせられた」という受け身の経験ではなく、「何かをしたい」という気持ちがあり、それが「コンピュータを使ってできた」という経験です。この経験を通して始めて、コンピュータの存在する意味が分かり得るのです。このような生の経験がないと、恣意的な言葉に踊らされることになります。

「コンピュータは道具である」といういい方があります。職人は道具を選びます。良い道具からのみ良いものが生まれるからです。こういう意味の道具なら「コンピュータは道具である」といっても良いでしょう。しかし、「コンピュータは道具である」をちょっと変えた、「コンピュータは単なる道具である」という卑しめる言い方もあります。「単なる道具である」なら、「そこには何も本質的なことはない」、「適当に使えるものを使えば良い」という姿勢になります。たまたま使える道具でできることしかやらなくなってしまうと、道具を選ぶどころか、道具に選ばれるようになり、道具に支配されるようになってしまいます。経験があれば、同じ「道具」という言葉に込められた意味の違いが察知できるでしょう。

最近はインターネットが話題になることが多いので、インターネットを使うことが進んでいる/良いものであると錯覚する人もいます。逆に、インターネットの全てが危険であるかのように煽り立てるものもあり、そう錯覚する人もいます。インターネットは我々の持つ選択肢を増やしますが、社会の中でどのように位置付けていくかはまだまだこれから考えていかなければならないものです。しかし、言葉だけで考えていると、配布された内容に対して適切な判断ができず、いつしかそれが自分の意見であるかのように錯覚してしまいます。「情報処理」ではインターネットを使ってみますが、これはインターネットがどのようなものであるのかについての実体験を持ち、自分の見方を作り、より良い選択をしていけるようになるためのものです。使ってみるということと、それを全面的に肯定していることは別のことであることに注意してください。

コンピュータを主体的に操作した経験を持つことと、日常的にコンピュータを利用することは区別しなければなりません。コンピュータとはどういうものであるかをある程度理解した上で、積極的にコンピュータを使用しないという選択もあるでしょう。また、コンピュータ的思考方法だけを活用するという選択もあるかもしれません。むしろ、知らずに忍び込むコンピュータ的思考方法を見つけてそれに対抗するために使うという考えもあるかもしれません。もちろん、大学の勉学や研究のためにコンピュータを利用することは増えていますので、全くコンピュータを使わないことは難しいのが現実です。しかし、コンピュータを使わなければならないような勉学や研究の環境の方が、逆に、おかしいのかもしれません。そこから考えてみて良いのです。

コンピュータを使ってみると、いろいろな知識が関連していることが分かるでしょう。インターネットで情報を発信するには、著作権のような法律に対する知識が必要となります。日本のように無方式主義の国ばかりではありませんから、世界における知的著作権の枠組について

もある程度知らないと困るでしょう。電子メールで海外とのやりとりも簡単にできるようになりますので、語学を活用する道も広がります。少し仕組みが分かれば、友人にちょっとした罫を仕掛けることができたりします。やってみたいという誘惑に負けないためには倫理観も必要です。自分の行動を律するだけでなく、友人が仕掛けた罫を発見したらどうするかという、より高度な判断が必要なこともあります。更に高度な判断には、どのような知的所有権の枠組が良い社会をもたらすか？ というものもあります。上の勉学や研究の環境の話とも関連しますが、このような判断の根底には個人の価値観がありますので、哲学でそれを鍛える必要もあるでしょう。このような必要性に対応できるのが、各分野の講義が揃っている教養学部です。積極的な活用を期待します。

(山口和紀 広域システム、情報・図形)

2. 数学の学び方

大学に入ったということは、一つの機会を与えられたということである。前向きにものごとを考え、自分のプラスになると思ったことは、どんどん実行してほしい。数学者になるのはそんなに簡単なことではないのだから。

おっと、断っておくがこの文章は数学を来々自分の職業とすることを希望している新入生を読者と想定している。とは言え、広い意味で科学者や研究者になりたい人もある程度は想定している。(その場合は数学を他の学問に置き換えてみて欲しい。)もちろんこの大学の学生がみな研究者を目指しているわけではないが、教官はそういうものだみなして教育をする、大学とはそういうところである。もちろん、みなが数学科に行くと仮定して教養の授業をやったりはしないが(それは迷惑である。)、何らかの研究者になることは目指しているとは、私は、仮定してやっている。

数学は高度に発達した学問であり研究者としてやっていくためには、大量の知識および専門的な技能の習得(証明を理解したり構成したりする能力など)が必要となる。それらをあくまでも前提とした上で、研究の独創性、重要性、思想などといったことが求められるわけである。たとえば、音楽家にとって一番大事で微妙なことは演奏の芸術性といったことだろうが、それ以前に楽譜どおりに音が出せなければ話にならないのである。この知識や技能の習得というのが大変である。他の専門的な職業と同じように早くはじめればはじめるほど有利である。

はっきり言って、東大が学生に用意している授業などのカリキュラムは数学科での後期課程をも含めて、研究者になるのには問題にならないぐらい不十分なものである。研究の最前線が、エベレスト冬季無酸素単独登頂だとすると、授業で出て来る範囲であつかわれるのは、夏に八ヶ岳のふもとをハイキングする程度の事である。学校の授業さえついていけばそのまま大学院に進めてそのうち研究職につけるなどというのはありえない話なのである。学校の授業とは別に前期課程の内から自分で先へ進むのでなければ、話にならない。もっとも数学者になりたいなどという人は数学がよっぽど好きな人なのであろうからこのようなことは言うまでもないと思う。

もっともなかには、数学の研究がしたいというよりは、むしろ「大学の先生」になりたいという人もいるかもしれない。しかし数学は大変といえば大変である。学者になるということは例えばプロ野球の選手のように自分の実力、実績のみを頼りにして生きてゆくということである。数学者として成功するかどうか、あるいは研究職に就けるかどうかということは、自分がどのような成果を挙げたかにかかっている。学生も含めて数学の研究者は自分の自由になる時間は多い。これは一見楽そうに見えるがそうでもない。自分のやることは結局は自分ですべて決めなければならないし、そしてその結果はすべて自分が被るのである。さらに現在大学院の定員に比べて研究職の空きポストが極端に少ないことが問題になっていたりするので、よほど

数学が好きでないかぎり、大学に残るつもりで数学科に進むのはやめたほうがいいとおもう。自分が、一番やりたいことをやるのがやはり一番である。

最初から社会に出るつもりの人とは話は別である。そのような人にはそれなりに授業も役立つだろうし、修士までだったら就職状況も今の所は悪くない。そのような意味では、現在の数学科の教育は学生が研究者になることを前提にしていないわけで、私の大学の理念からはかけ離れてしまっている。

繰り返すが、大学に入ったということは、一つの機会を与えられたということである。前向きにものごとを考え、自分のプラスになると思ったことは、どんどん実行してほしい。特に数理科学研究科は駒場にあるので、絶好の条件が整っている。研究科の建物にいけば、数学の図書も完備しているし、実際に研究をしている人達がいるのである。ただ単に与えられるものだけを学んでいるのでは、話にならないのである。こちらの方から押しかけていろいろな話を聴くぐらいのことはするべきじゃないかと思う。勉強の進め方や、現在の数学の最前線の様子などいろいろ参考になることも多いと思う。

いうまでもないがこの、「前向きにものごとを考え、自分のプラスになると思ったことは、どんどん実行する。」ということは研究者にとってとても重要な資質である。人生は一度きりなのだから、後悔しないように頑張る欲しい。

(松本久義 数理)

3. 熱力学・構造化学・物性化学の学びかた

標記勉強法のアドバイスを書くように依頼され、執筆を始めたが、勉強法は各自が自分で編み出したものがベストで、人まねは役立たないことは先刻ご承知であろう。たとえ、自分の勉強法が教養学部1、2年の間、有効でなかったとしても、ロングレンジで威力を発揮すれば、これに優るものはない。ということで、誰も読まないであろう原稿を書くことになり、筆が進まない。

熱力学は、熱現象を巨視的立場からとらえて構築された学問体系で、経験的な事実に立脚して、系を構成する分子の構造や、それらの間の相互作用に関して何らの仮定も設けることなく、すべての熱現象について普遍的に成り立つ関係を導き出す理論体系であるとうたわれている。しかしながら熱力学を学ぶとき、何らかの分子論的なイメージを頭に描いて理解しようとする人はいないのではないか、この点で非常に想像力が必要とされる学問であると思う。また熱力学と時間との間の関係もすっきりしない。化学者は試料を5分も恒温槽につければ熱平衡状態が実現されると考える。熱力学は平衡状態を主たる考察の対象としているのであるから、化学者のこのような実験法を保証すべきであると思うが、教科書の記述によっては、準静的過程とよばれる平衡状態間の変化について、とてもこの世では実現されないアイデアの世界での過程であるかのような印象を得てしまう。気体を膨張させようと思ったら、外圧を気体の圧力より低くしなければならないという至極当たり前の事実を、出入りする熱量を用いて表現したときエントロピーが導入されるのであるが、ひとたび定式化されてしまうと、あれよあれよという間に式が展開されて、分子論的な想像力を働かせる機会がなくなる。しかしこれこそ熱力学の威力で、勢いに身をまかせるしかない。この間、混合のエントロピーを計算するために、混合気体の一方の成分しか通さない半透膜を用いた思考実験が出てくる。その種の膜の実在性に思いをめぐらして悩むかもしれないが、この思考実験の意義は混合という現象の本質を摘出している点にあると考えるとわかったような気になる。それやこれやで、化学者にとってもっとも有用なツールの一つである化学ポテンシャルという概念に到達するのであるが、最後にもう一度活量という物理量が形式的に導入されるのを堪え忍ばねばならない。ここにいたり、化学熱力学の核心を理解したことになる。なぜなら、相平衡や化学平衡などの熱力学的平

衡は化学ポテンシャルを用いて理論的に記述されるからである。

熱力学が物質の巨視的な性質を、物質を構成している分子の具体的な構造に立ち入らずに定式化する学問であったのとは対照的に（たとえば安息香酸とその誘導体の酸としての強さは、熱力学では pK_a の違いとしてしか説明されない）、構造化学では原子や分子の構造そのものについて、実験的・理論的基礎を学ぶ。ここで、原子や分子のようなミクロの世界を支配している法則が量子力学であるので、基本的な量子力学的な概念を必要最小限理解する必要がある。しかしながら、波動関数、エネルギー固有値、電子スピンと初めて聞くような言葉が次々に出てくることにだれしも大きな戸惑いを感じることであろう。ここで注意すべきことは、講義ではこれらの概念を量子力学の教科書のように抽象的・演繹的に教えるのではなく、実例を数多く挙げて講義することにより、習うよりは慣れろ式に、しかし正確な概念の修得を目指している点である。Planck定数 h が導入された歴史的経緯は実験事実に基づいて説明されるので、容易に理解できるであろう。ただし黒体放射は難しく書いてある教科書が多い。箱の中の粒子のSchrödinger方程式は数学的な困難さなしに解くことができ、波動関数、エネルギー固有値、量子数、波動関数の規格直交性といった量子力学特有の概念をほとんどすべて学ぶことができる。したがってここが理解できれば、化学結合を理解するのに必要な量子論をあらかじめマスターできたことになる。水素原子のSchrödinger方程式を解くことはしないが、その解についての知識は量子化学の基本となるので、よく理解することが大切である。多電子原子では電子間相互作用のため、原子軌道のエネルギー準位が水素原子の場合と異ってくる。電子スピン、Pauliの原理の導入により、多電子原子の基底状態の電子配置、すなわち元素の周期律が説明される。さらに N_2 や O_2 のような等核二原子分子、HClのような異核二原子分子がなぜできるのかが分子軌道法に基づいて説明され、それらの分子が示す性質も電子構造との関連により理解される。元素の周期律がなぜ成り立つのか、なぜ分子ができるのかを量子論に基づいて理解するのが構造化学学習の目標であるが、化学ポテンシャルの理解同様、ここにいたるまでには必要とされる基礎的な知識の着実な積み重ねが要求される。

物性化学では、構造化学で修得した量子論的方法をさらに複雑な分子に適用して、それらの分子の構造、性質、反応について学ぶ。したがって構造化学を理解していないと、勉強についていけないことになるが、これは重大な問題である。さらに熱力学、構造化学では優れた参考書が多数あったが、講義内容が多岐にわたる物性化学では、一冊で全内容をカバーできるような適当な参考書がない。したがってこの科目に対する最良のアドバイスは授業に出席することということになる。物性化学に限らず、授業に出席することがもっとも効率のよい勉強法であろうと思われるが、冒頭に述べたように、ショートレンジの効率の追求を薦めるこの種のアドバイスは大して参考にならないのである。

（菊地一雄 生命、化学）

8 困ったときどうするか

保健センターでは、駒場キャンパスに在籍する学生・教職員の健康管理、学内で発生した事故やけがの手当、発熱や腹痛などの病気に対する診療サービスを行っている。正門からみて、学内掲示板のすぐ奥にある2階建ての建物がそれである。

大きくわけて、診療部門と健康管理部門の2つの柱で運営されている。

学生・教職員を対象とした一般診療を、月曜日から金曜日までの午前10時から午後0時および午後2時から午後4時まで行っている（表）。内科では、各病気（たとえば、胃腸、心臓、腎臓、肺）の専門医が交替で最低1名常駐している。また、整形外科の医師が火曜日と金曜日の午前中、皮膚科の医師が火曜日の午後、歯科医師が月曜日の午前と金曜日の午後に診療を行っている。歯科と皮膚科は予約制なので、前もってセンターに来て予約簿に記入する必要があるが、他の科は予約不要である。健康保険証は不要で学生証を提示すればよい。初診料、再診料は不要なので、風邪、けがの処置ならば外部の医療機関より経済的で、特に授業中のけがは無料で治療を受けることができるが、慢性疾患で定期的に薬をもらうとかえって割高となる可能性がある。また、本郷の大学附属病院を初めとしていくつかの専門病院を紹介することも可能である。

20歳前後は、一生の中でも病気にかかる可能性の最も少ない時期ではあるが、気管支喘息、胃潰瘍、貧血などこの年代に比較的頻度の高い疾患もあるので注意が必要である。中でも気管支喘息は、命にかかわるような発作を起こすことがある。経口薬、点滴、ネブライザーがそろっているので、調子が悪そうなときはすぐ来てもらいたい。また、夜間に救急で利用できる病院とも提携していて、紹介することも可能である。

また、こころの問題で苦しいのかな、と感じられたときは精神神経科に気軽に相談することもできる。たとえば、学内で継続して相談や診療を受けたくない、学内では通いづらい、という方には適切な場所を紹介することも行っている。また、心理療法を体験してみたい、という方の相談や、学生のこころの問題で心配されている両親、家族、友人の相談も可能である。

健康管理室では、入学前3月に行う新入生健康診断と2年生以上を対象とした年1回の健康診断（毎年4月に行っており、平成8年度は4月14日から25日にかけて行った。2年生以上は全員受ける必要がある。）を行っている。（ちなみに教職員の健康診断は毎年秋に実施している。）新入生は、3月の入学前に全員が受けているので問題ないが、2年生以降この健康診断を受けないと、健康診断証明書を発行できず、奨学金等の支給が受けられなくなることがあるので必ず受診するようにしてもらいたい。

健康診断で異常が見つかった者を対象とした2次検査および以降のフォローアップも健康管理室の重要な任務のひとつである。これには、後で述べる電子メールが重要な仲立ちをしている。

健康診断証明書の発行も、健康管理室で行っているが、申請当日発行できるものと、追加の検査を行いその結果を待って発行するものがある。いずれにしても医師の診断が必須である。木曜日、金曜日の午後2時から4時までには医師が2名常駐しており、この時間帯が最も待ち時間が少なく発行できるので、なるべくこの時間帯に申請することをお奨めする。

健康管理室では、医師または保健婦による健康相談も随時受けつけている。健康上の問題で悩んでいる方、何科にかかったら良いか迷っている方、体重のコントロールが必要な方など、健康上の問題で困っている方などは健康管理室と相談することが可能である。

その他に、健康管理室が主催して年に1-2回医療に関する講演会を行っている。前もって、掲示、ホームページ等で案内するので興味があれば是非参加してほしい。たとえば最近の例で

は、気管支喘息の治療、エイズに関する講演会を図書館の3階会議室で行い、学生、教職員多数の参加を得ている。

平成8年、保健センターでは、ホームページを開設した。アドレスは、
<http://www.h.u-tokyo.ac.jp/uthealth/indexk.htm>である。保健センターの紹介だけでなく、健康に関するいろいろな情報が盛り込まれているので、時々のもいでみてほしい。たとえば、

- 1. 破傷風の予防について
- 2. 病原性大腸菌O157について
- 3. 蛋白尿と潜血尿について
- 4. 高血圧症について
- 5. 高脂血症について
- 6. 飲酒事故を防ぐために
- 7. それでもタバコをすいますか
- 8. エイズについて

など詳しくかつわかりやすく解説している。

大学に入ると、電子メールアドレスが全員に支給される。健康管理室からの案内は、一般の掲示に加えて電子メールでも行うので、電子メールを定期的にチェックする習慣をつけてもらいたい。また、健康診断で異常が見つかった際の再検査呼び出しは、プライバシーの問題があり掲示できないので電子メールで行い、どうしても連絡がつかない場合手紙を郵送している。早く再検査を受け十分な治療管理を行うために電子メールのチェックを欠かさないでほしい。

(保健センター 山崎力)

診 療 日 程 表

平成9年2月現在 [] は非常勤講師

科	曜日		月	火	水	木	金	備 考
内 科	午 前		菅野	安藤or山崎	張	張	安藤	10：00～12：00
	午 後		菅野/上床	山崎	張or菅野	山崎/奥田	安東/藤沢	2：00～ 4：00
歯 科	午 前		[上田]					10：00～12：00
	午 後						[青柳]	2：00～ 4：00
整 形 外 科	午 前			[捶井]			[渡会]	10：00～12：00
精神神経科	午 前		藤山	河村		磯田/[久田]	藤山	10：00～12：00
	午 後		藤山	河村	[奥村]	磯田	藤山	2：00～ 4：00
皮 膚 科	午 後			[小宮根]or [神田]				2：00～ 4：00

付属資料

平成9年度授業日程表

4月9日(水)～7月22日(火)	夏（1・3）学期授業（15週）
4月11日(金)	入学式
7月23日(木)～7月30日(水)	夏（1・3）学期試験前半（6日）
7月31日(木)～8月31日(日)	夏季休業
9月1日(月)～9月8日(月)	夏（1・3）学期試験後半（6日）
9月9日(火)～10月9日(木)	秋季休業
10月13日(月)～12月24日(水)	冬（2・4学期）学期授業前半（10週3日）
12月25日(木)～1月7日(水)	冬季休業
1月8日(木)～2月5日(木)	冬（2・4学期）学期授業後半（4週1日）
2月6日(金)～2月24日(火)	冬（2・4学期）学期試験（実数12日）

教養学部 of 授業時間

1時限	9時00分～10時30分
2時限	10時40分～12時10分
3時限	13時00分～14時30分
4時限	14時40分～16時10分
5時限	16時20分～17時50分
6時限	18時00分～19時30分

平成 8 年度志願、合格、入学状況

教養学部前期課程

科 類	試験日程	志願者	受験者	合格者	入学者	定員外		入学者総数
						特選第 1 種	国費	
文科一類	前期	1,955	1,759	591(8)	590(6)	1	1	662
	後期	1,817	313	65	64			
二類	前期	1,210	1,062	355(10)	355(8)	2	4	409
	後期	865	192	40	40			
三類	前期	1,616	1,336	447(8)	443(4)	2	2	510
	後期	1,718	267	59	59			
理科一類	前期	3,083	2,880	1,167(9)	1,159(4)	4	19(5)	1,319
	後期	2,239	608	142	133			
二類	前期	1,943	1,724	506(3)	501(2)	0	0	564
	後期	567	259	66	61			
三類	前期	423	313	81(2)	80(2)	0	0	92
	後期	167	43	10	10			
計	前期	10,230	9,074	3,147(40)	3,128(26)	9	26(5)	3,556
	後期	7,373	1,682	382	367			

定員外・国費に外国政府派遣を含む [() 内の数]

教養学部後期課程

学 科*	平成 8 年度進学者	学士入学者	平成 9 年 3 月卒業予定者
教 養 学 科第一	34		38
第二	46	7	45
第三	38		33
基礎科学科第一	42		53
第二	18		19
計	178	7	188

* 後期課程は平成8年度より5学科より6学科（超域文化科学科，地域文化研究学科，総合社会科学科，基礎科学科，広域科学科，および生命・認知科学科）体制に改組されたが，平成10年3月31日以前に進学した学生は従来の5学科の規則にて履修する

大学院総合文化研究科

専 攻	修士課程			博士課程		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
言語情報科学	124	33	32	48	26	25
超域文化科学	135	43	42	54	33	33
地域文化研究	115	46	44	46	34	33
国際社会科学	132	32	29	45	25	23
広域科学	339	123	113	74	64	61
（生命環境科学系）	(148)	(49)	(46)	(38)	(37)	(36)
（広域システム科学系）	(49)	(32)	(27)	(12)	(9)	(9)
（関連基礎科学系）	(142)	(42)	(40)	(24)	(18)	(16)
計	845	277	260	267	182	175

平成9年度進学内定者数

平成8年10月28日

上段：第一段階 下段：第二段階

学部学科	定数	内定者数							再志望			合計
		文一	文二	文三	理一	理二	理三	小計	文三	理一	理二	
法		664 9	2	5	5			676 9				685
経済			381 24	13	3	4		401 24				425
文	416	4 1	6 1	248 112	4 9	10 10		272 133	6			411
教育	88		1	49 24	6 5	4 4		60 33				93
理	322			1	168 67	60 48		229 115				344
工	1,040		2	2 1	617 324	50		671 325		36		1,032
農	300		2 2	7 3	24 13	165 84		198 102			9	309
薬	80				11 5	45 22		56 27				83
医	医学	100			1	10	94	105				105
	健康科学 看護	43		5	6 1	19 9		30 10		2	2	44
教養	教養*	126	14 4	16 8	42 17	6 4	8 2	86 35				121
	基礎科学**	77			1 19	31 12	15 1	48 31				79
計		682	410	373	882	390	95	2,832				3,676
		14	35	157	447	191		844	6	38	11	

1志望等・再志望の計	536	1,367	592
------------	-----	-------	-----

備考 本表には下記の外国人留学生在含まれており、いずれも第一段階で内定している。

法学部 特別選考第1種留学生1名。

経済学部 国費外国人留学生4名、特別選考第1外国人留学生2名。

理学部 国費外国人留学生1名。

工学部 国費外国人留学生10名。外国政府派遣留学生5名。特別選考第1種外国人留学生5名。

教養学部 国費外国人留学生1名。

*, **教養三学科および基礎科学科二学科の合計。なお、平成8年度発足した新6学科への振分けは平成10年度以降となる。

定員の推移

(平成3年度～平成8年度，教養学部前期課程入学者定員・後期課程定員，大学院総合文化研究科定員)

	科 類	平成3年 1991年		平成4年 1992年		平成5年 1993年		平成6年 1994年		平成7年 1995年		平成8年 1996年	
前 期 課 程	文科一類	710		710		710		710		675		655	
	文科二類	410		430		430		430		405		395	
	文科三類	480		500		500		500		500		500	
	理科一類	1,305		1,315		1,295		1,295		1,295		1,295	
	理科二類	541		541		561		561		561		561	
	理科三類	90		90		90		90		90		90	
	計	1,600	1,936	1,640	1,946	1,640	1,946	1,640	1,946	1,580	1,946	1,550	1,946
		3,536		3,586		3,586		3,586		3,526		3,496	

定員の推移

	科 類	平成3年 1991年		平成4年 1992年		平成5年 1993年		平成6年 1994年		平成7年 1995年		平成8年 1996年	
後 期 課 程	教養学科第一	30		30		30		30		30			
	教養学科第二	35		45		45		45		45			
	教養学科第三	10		10		10		10		10			
	基礎科学科第一	60		60		60		60		60			
	基礎科学科第二	15		15		15		15		15			
	計	75	75	85	75	85	75	85	75	85	75		
		150		160		160		160		160			

【平成8年（1996年）4月，後期課程改組】

	学 科	平成8年 1996年											
後 期 課 程	超域文化科学科	20											
	地域文化研究学科	35											
	総合社会科学科	15											
	基礎科学科	50											
	広域科学科	20											
	生命・認知科学科	20											
	計	160											

	専 攻	修士		博士		修士		博士		修士		博士		修士		博士	
大 学 院 総 合 文 化 研 究 科	比較文学比較文化	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				
	表象文化論	6		6	3	6	3	6	3	6	3						
	言語情報科学					30		30		30	24	30	24				
	超域文化科学*											41	29				
	地域文化研究	12	6	12	6	12	6	12	6	12	6	43	27				
	国際社会科学*											34	23				
	国際関係論	7	4	7	4	7	4	7	4	7	4						
	相関社会科学	7	3	7	3	7	3	7	3	7	3						
	文化人類学	6	4	6	4	6	4	6	4	6	4						
	広域科学** (生命環境科学系) (広域システム科学系) (相関基礎科学系)	11	6	11	5	11	5	58	32	100 (38) (25) (37)	61 (23) (15) (23)	100 (38) (25) (37)	61 (23) (15) (23)				
計		52	26	52	28	82	28	129	55	171	108	248	164				
		78		80		110		184		279		412					

* 平成8年度より，比較文学比較文化，表象文化論，文化人類学の3専攻は超域文化科学専攻へ改組。
また，国際関係論，相関社会科学の2専攻は国際社会科学専攻へ改組。

** 広域科学専攻は平成6年度より3系からなる専攻に拡充改組された。各系毎の定員数は目安である。

平成 8 年度クラス編成表（１年）

(平成 8 年 5 月 1 日現在)

文科一類		文科二類		計
入学	留年	入学	留年	
1 A		1		1
2 C	3			3
3 E	32	25		57
4 E	32	26		58
5 E	32	26		58
6 E	32	1	27	60
7 E	33	26		59
8 F	7	2	2	11
9 G	23	20		43
10G	23	20		43
11H	8	4		12
12B	31	16		47
13B	31	16		47
14B	32	17		49
15B	31	18		49
16B	30	18		48
17B	30	18	2	50
18D	34	16		50
19D	34	16		50
20D	34	15		49
21D	34	15		49
23D	19	10		29
24D	33	16		49
25D	33	15	1	49
26 E	31	26		57

(合計1,077)

文科三類		計	
入学	留年		
1 A	3	3	
2 C	3	3	
3 E	52	1	53
4 E	52	1	53
5 E	52		52
6 F	16		16
7 G	31		31
8 H	6		6
9 B	38		38
10B	38		38
11B	37	1	38
12D	46	1	47
13D	46	1	47
14D	45	1	46
15D	45	1	46

(合計517)

- A：ドイツ語既修クラス
B：ドイツ語未修クラス
C：フランス語既修クラス
D：フランス語未修クラス
- E：中国語未修クラス
F：ロシア語未修クラス
G：スペイン語未修クラス
H：朝鮮語未修クラス

	理科一類		計
	入学	留年	
1 A	3		3
2 C	4		4
3 E	54	2	56
4 E	54	1	55
5 E	55	1	56
6 E	54		54
7 F	24	3	27
8 G	36		36
9 G	36		36
10B	50		50
11B	49		49
12B	49	1	50
13B	48		48
14B	49		49
15B	49		49
16B	49	2	51
17B	49	1	50
18B	48		48
19B	49		49
20B	49	2	51
21B	50	1	51
22B	49	1	50
23D	52	2	54
24D	52		52
25D	52		52
26D	51		51
27D	51		51
28D	51	2	53
30 E	53		53

(合計1,338)

	理科二類		理科三類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A	3		1		4
2 C	2		2		4
3 E	59	1	3		63
4 E	59	1	2		62
5 F	10				10
6 G	41	1			42
7 B	41		10		51
8 B	41	1	10		52
9 B	40		9		49
10B	40		10		50
11B	40		9		49
12B	40		9		49
13B	40	1	9	1	51
14D	35		6		41
15D	37		6		43
16D	36		7		43

(合計662)

総計 3,594名

平成 8 年度クラス編成表（2年）

(平成 8 年 5 月 1 日現在)

文科一類		文科二類		計
進級	留年	進級	留年	
1 A	1	1	1	3
2 C	6	6		12
3 E	34	24	5	64
4 E	34	24	1	62
5 E	34	23	1	62
6 E	33	22	3	60
7 E	34	23	5	65
8 F	11	12	1	25
9 G	27	16		43
10G	26	16	1	35
11B	26	18	2	46
12B	26	17	2	48
13B	26	17	3	48
14B	26	16	1	47
15B	26	16		42
16B	26	16		45
17B	25	16	1	44
18D	34	18	2	56
19D	34	18	2	57
20D	34	18	1	53
21D	34	17		52
22D	34	17	1	52
23D	20	10	1	34
24D	34	17	2	54
25 E	34	16	2	56

(合計1,184)

文科三類		計
進級	留年	
1 A	2	2
2 C	1	1
3 E	43	47
4 E	45	49
5 E	45	45
6 F	13	16
7 G	41	45
8 B	36	44
9 B	37	44
10B	37	38
11D	51	64
12D	50	58
13D	50	64
14D	48	52

(合計568)

- A：ドイツ語既修クラス
B：ドイツ語未修クラス
C：フランス語既修クラス
D：フランス語未修クラス
- E：中国語未修クラス
F：ロシア語未修クラス
G：スペイン語未修クラス

総計 4,055名

理科一類		計
進級	留年	
1 A	2	2
2 C	3	3
3 E	56	63
4 E	55	66
5 E	54	54
6 F	22	30
7 G	34	39
8 G	33	47
9 B	50	50
10B	50	61
11B	50	63
12B	50	55
13B	51	62
14B	50	59
15B	50	59
16B	49	56
18B	50	56
19B	49	58
20B	49	54
21B	50	71
22B	50	71
23D	48	62
24D	46	56
25D	47	56
26D	47	59
27D	47	54
28D	45	55
29D	46	54
30 E	55	67

(合計1,498)

理科二類		理科三類		計
進級	留年	進級	留年	
1 A	4	1		6
2 C	2	1		5
3 E	51	1		67
4 F	6			10
5 G	27	1		35
7 B	45	10		58
8 B	45	10	1	61
9 B	45	10	1	63
10B	45	10		63
11B	45	10		63
12B	44	10		59
13B	42	9		64
14D	39	6		55
15D	38	6		49
16D	38	6		52
17E	48	1		49

(合計761)

外国人研究生

総合文化研究科大学院研究生，外国人研究生数

(平成 8 年11月 1 日現在)

専攻	大学院研究生	外国人研究生	計
言語情報科学	4	11	15
超域文化科学	3	24	27
地域文化研究	2	10	12
国際社会科学	5	11	16
広域科学	10	7	17
計	24	63	87

教養学部学部研究生数

(平成 8 年10月 1 日現在)

後期課程	23	(このうち外国人8)
------	----	------------

前期課程には，学部研究生制度がない。
研究生の出願資格は，4年制大学卒業又は同程度の学力をもつ者。

平成8年度から9年度にかけての役職者

役職者・専攻・系主任および学科長

研究科長・学部長	市村 宗 武	地域文化研究専攻主任	山内 昌 之
	平成9年2月15日まで	国際社会科学専攻主任	石 井 明
	大 森 彌	広域科学専攻主任	浅 島 誠
	平成9年2月16日から	生命環境科学系主任	大 森 正 之
評議員	永 野 三 郎	相関基礎科学系主任	兵 頭 俊 夫
評議員	山 中 桂 一	広域システム科学主任	田 邊 裕
総長補佐	岩 田 一 政	超域文化科学科長	岩 佐 鉄 男
研究科長補佐	増 田 茂	地域文化研究学科長	中 井 和 夫
	石 田 英 敬	総合社会科学科長	杉 浦 克 己
	加 藤 道 夫 (建設)	基礎科学科長	小宮山 進
言語情報科学専攻主任	高 村 忠 明	広域科学長	田 邊 裕
超域文化科学専攻主任	川 本 皓 嗣	生命・認知科学科長	川 口 昭 彦

総合文化研究科および教養学部内の各種委員会委員長および議長・代表など

研究科委員会	市村 宗 武	防災委員会	市村 宗 武
研究科委員会（議長）	山内 昌 之	国際交流委員会	小 川 浩
前期運営委員会	市村 宗 武	奨学委員会	中 井 和 夫
制度小委員会①	田 邊 裕	放射線安全委員会	馬 淵 一 誠
制度小委員会②	兵 頭 俊 夫	進学情報センター運営委員会	小 林 啓 二
制度小委員会③	高 村 忠 明	放射線施設運営委員会	赤 沼 宏 史
制度小委員会④	浅 島 誠	組み換えDNA実験安全委員会	庄 野 邦 彦
教務委員会	成 田 篤 彦	実験動物委員会	松 田 良 一
予算委員会	小牧研一郎	石綿問題委員会	中 村 保 夫
広報委員会	湯 浅 博 雄	アメリカ研究資料センター運営委員会	山 本 吉 宣
	平成8年9月まで	学友会評議員	杉 浦 克 己
	長 崎 暢 子	毒物・危険物管理安全委員会	浅 島 誠
	平成8年10月より	学生相談所運営委員会	河 内 十 郎
入試委員会	久保内端郎	文化施設運営委員会	吉岡大二郎
	平成8年9月まで	短期交換留学運営委員会	木 畑 洋 一
	赤 沼 宏 史	ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会	
	平成8年10月より		大 築 立 志
教育・研究評価委員会	林 利 彦	T A 委員会	永 野 三 郎
学生委員会	大 貫 隆	スペース・コラボレーションシステムSCS運営委員会	
	平成8年9月まで		鈴 木 英 夫
	吉岡大二郎	健康安全委員会	市村 宗 武
	平成8年10月より	美術館博物館委員会	大 貫 良 夫
三鷹国際学生宿舎特別委員会	小 林 寛 道	自然科学博物館運営委員会	横 山 正
三鷹国際学生宿舎運営委員会	三 角 洋 一	オルガン委員会	塚 本 明 子
	平成8年9月まで	視聴覚ホール運営委員会	岩 佐 鉄 男
	永 山 國 昭	保健センター駒場支所長	菅野健太郎
	平成8年10月より	学生論文集編集委員会	古 田 元 夫
図書委員会	長 尾 龍 一	自己評価プロジェクト委員会	市村 宗 武
後期運営委員会	中 井 和 夫	アンケート実施委員会	廣 松 毅
将来計画特別委員会	市村 宗 武	拡大教育・研究評価委員会	林 利 彦
環境委員会	庄 野 邦 彦		
発明委員会	市村 宗 武		
建設委員会	永 野 三 郎		
研究棟管理運営委員会	生 井 澤 寛		
	平成9年1月まで		
	松 本 忠 夫		
	平成9年1月より		
留学生委員会	並 木 頼 壽		
計算機委員会	川 合 慧		

部会主任およびその他の前期教育担当グループ責任者

英語	小川 浩
	平成8年9月まで
	滝田 佳子
	平成8年10月より
ドイツ語	吉島 茂
フランス語	支倉 崇晴
中国語・朝鮮語	高橋 満
ロシア語	桑野 隆
スペイン語	竹村 文彦
	平成8年9月まで
	上田 博人
	平成8年10月より
古典語	水谷 智洋
外国語委員会委員長	高橋 満
法・政治	高橋 直樹
経済	岩田 一政
社会・社会思想史	見田 宗介
統計	廣松 毅
国際社会	山本 吉宣
	平成8年9月まで
	山影 進
	平成8年10月より
歴史学	三谷 博

事務部

事務部長	杉田 信孝
総務課長	久保田 忠
経理課長	真取 秀明

国文・漢文学	神野志隆光
	平成8年9月まで
	三角 洋一
	平成8年10月より
人類学	伊藤 亜人
哲学・科学史	山本 巍
心理・教育学	繁樹 算男
人文地理学	谷内 達
人文科学委員会委員長	山本 巍
物理	風間 洋一
化学	小林 啓二
生物	高橋 正征
情報・図形	横山 正
	平成8年9月まで
	川合 慧
	平成8年10月より
宇宙地球	中村 保夫
相関自然	小宮山 進
スポーツ・身体運動	小林 寛道
数理科学研究科長	落合卓四郎
数学教室主任	薩摩 順吉

教務課長	坂田 一男
学生課長	右松 鉄人
図書課長	金原 貴洋

1997年2月末現在

[駒場]1996 SUPPLEMENT

平成9年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科 研究科長 大森 彌

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6583 (ダイヤルイン)

編集：[駒場] 1996 SUPPLEMENT 年報編集委員会

委員長：林 利彦

委員：石田 英敬

齊藤 文子

一條麻美子

鈴木賢次郎

市村 宗武

永野 三郎

大堀 俊夫

古田 元夫

小河 正基

増田 茂

鬼塚 雄丞

山下 晋司

國場 敦夫

山中 桂一

小林 康夫

制作：メディアフロント

〒151 東京都渋谷区代々木4-9-5-313

TEL 03-3373-6521
